

仙台市文化財調査報告書第 398 集

六 反 田 遺 跡

第 9 次発掘調査報告書

2012 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第 398 集

六 反 田 遺 跡

第 9 次発掘調査報告書

2012 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市の文化財文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。市内には、旧石器時代から近世に至るまで、数多くの埋蔵文化財が残っています。当教育委員会といたしましては、市民の皆様からのご理解・ご協力のもと、これらの文化財を保存・活用し、次世代へ継承していくように努めています。

本報告書は仙台市立大野田小学校の校舎増築計画に伴い、平成 23 年度に実施しました六反田遺跡第 9 次発掘調査成果をまとめたものです。

大野田小学校が所在する大野田地域は、仙台市内でも数多くの遺跡が分布している地域で、現在、富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われています。近年、春日社古墳の革盾や六反田遺跡の木棺墓、大野田官衙遺跡など重要な発見がありました。

今回の調査の結果、奈良から平安時代にわたる土地利用の変遷の様子が明らかになりました。また、今回の調査地点は小学校の敷地内に位置しており、小学校の授業と連携し、児童、教員及び保護者を対象とした遺跡見学会を実施しました。

本報告書が学術研究はもとより、市民の皆様にも広く活用され、地域の歴史と文化財に関心を抱く契機になれば幸いです。

最後になりましたが、昨年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、仙台市内も大きな被害を受け、校舎が被災した学校もあります。現在仙台市は「ともに、前へ仙台～3.11からの再生～」を掲げて、復興計画を進めているところです。そうした中、発掘調査ならびに本報告書刊行にあたり、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申しあげる次第です。

平成 24 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 青沼 一民

例 言

1. 本書は「仙台市立大野田小学校校舎増築計画」に伴い、仙台市教育委員会が平成23年度に実施した六反田跡第9次発掘調査の成果についてまとめたものである。
 2. 本書の作成業務は仙台市教育委員会が国際文化財株式会社に委託をして行った。
 3. 報告書刊行にあたっては、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係庄子裕美、工藤信一郎の監理の下、国際文化財株式会社が担当した。
 4. 本書の執筆については第1章第1節を庄子裕美が、第2節以下第2章・第4章を川又理枝(国際文化財株式会社)が行った。
 5. 本調査の実施に際し、仙台市立大野田小学校および仙台市教育委員会総務企画部学校施設課の協力を得ている。
 6. 調査、整理に関する全ての資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

目 次

序文

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
1.調査経緯	1
2.調査要項	1
第2節 遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境	1
1.地理的環境	1
2.歴史的環境	3
第3節 調査の方法と経過	
1.調査の方法	3
2.調査の経過	3
3.普及活動について	4
第2章 基本層序	4
第3章 検出遺構と出土遺物	10
第1節 III a層上面検出遺構	10
1.溝跡	12
2.土坑	12
3.性格不明遺構	13
4.遺構外出土遺物	14
第2節 V層上面検出遺構	15
1.竪穴住居跡	16
2.掘立柱建物跡	28
3.溝跡	36
4.土坑	37
5.小溝状遺構群	41
6.遺構外出土遺物	45
第3節 下層部の調査	50
第4章まとめ	52
第1節 出土遺物について	52
第2節 遺構の変遷について	55
第3節 まとめ	56

挿図目次

第 1 図 六反田遺跡の位置と周辺遺跡分布図	2	第 31 図 SB 6 挖立柱建物跡および周辺土坑・ SB 7 挖立柱建物跡平面図	33
第 2 図 六反田遺跡基本層対応模式図	4	第 32 図 SB 6 挖立柱建物跡および周辺土坑・ SB 7 挖立柱建物跡断面図	34
第 3 図 調査区位置図・グリッド配置図	6	第 33 図 SD 5 溝跡断面図・出土遺物・ SD 7 溝跡断面図	36
第 4 図 基本層序柱状図	6	第 34 図 SK 4・11 土坑平面図・ 遺物出土分布図・断面図	37
第 5 図 基本層序 東壁	7	第 35 図 SK 13 土坑平面図・遺物出土分布図・断面図・ SK 5・8・10 土坑平面図・断面図	38
第 6 図 基本層序 南壁・西壁(1)	8	第 36 図 SK 12・14・15 ~ 17・19・20・22 土坑 平面図・断面図	39
第 7 図 基本層序 西壁(2)・北壁	9	第 37 図 SK 4・11・13 土坑出土遺物	40
第 8 図 III a 層上面遺構配置図	11	第 38 図 小溝状遺構群変遷図	41
第 9 図 SD 1 ~ 4 溝跡断面図	12	第 39 図 小溝状遺構群出土遺物	42
第 10 図 SK 1 土坑平面図・断面図	13	第 40 図 小溝状遺構群断面図・ エレベーション図(1)	43
第 11 図 SX 2 性格不明遺構平面図・断面図	13	第 41 図 小溝状遺構群断面図・ エレベーション図(2)	44
第 12 図 SX 3 性格不明遺構平面図・断面図	13	第 42 図 IV 層遺物出土分布図	45
第 13 図 SX 5 性格不明遺構平面図・断面図	13	第 43 国 IV 層出土遺物(1)	45
第 14 図 SX 7 性格不明遺構平面図・断面図	14	第 44 国 IV 層出土遺物(2)	46
第 15 国 III a 層遺物出土分布図	14	第 45 国 遺構外出土遺物(縄文土器)	47
第 16 国 III a 層出土遺物(1)	14	第 46 国 遺構外出土遺物(弥生土器他)	48
第 17 国 III a 層出土遺物(2)	15	第 47 国 遺構外出土遺物(石器)	49
第 18 国 V 層上面遺構配置図	17・18	第 48 国 トレンチ 1・2 平面図・ 断面図・遺物出土分布図	50
第 19 国 SI 1 積穴住居跡平面図	19	第 49 国 トレンチ 3 平面図・ 断面図・遺物出土分布図	51
第 20 国 SI 1 積穴住居跡断面図	20	第 50 国 下層トレンチ出土遺物	51
第 21 国 SI 1 積穴住居跡振り方平面図	22	第 51 国 遺構変遷図	53・54
第 22 国 SI 1 積穴住居跡出土遺物(1)	23		
第 23 国 SI 1 積穴住居跡出土遺物(2)	24		
第 24 国 SI 2 積穴住居跡平面図・断面図	26		
第 25 国 SI 2 積穴住居跡出土遺物	27		
第 26 国 SB 1 挖立柱建物跡平面図・断面図	28		
第 27 国 SB 2 挖立柱建物跡平面図	29		
第 28 国 SB 2 挖立柱建物跡断面図	30		
第 29 国 SB 3 挖立柱建物跡平面図・断面図	31		
第 30 国 SB 4・5 挖立柱建物跡平面図・断面図	32		

挿表目次

第 1 表 調査区断面注記表	10	第 5 表 SB 1 挖立柱建物跡計測表・ 土層注記表	29
第 2 表 SI 1 積穴住居跡床面施設観察表	20	第 6 表 SB 6 挖立柱建物跡および周辺土坑・ SB 7 挖立柱建物跡計測表・土層注記表	35
第 3 表 SI 1 積穴住居跡土層注記表	21		
第 4 表 SI 2 積穴住居跡土層注記表	27		

写真図版目次

写真図版 1 調査区周辺・調査区全景	60	写真図版 7 土坑(1)	66
写真図版 2 基本層序	61	写真図版 8 土坑(2)	67
写真図版 3 SI 1 積穴住居跡(1)	62	写真図版 9 土坑(3)	68
写真図版 4 SI 1 積穴住居跡(2)・ SI 2 積穴住居跡(1)	63	写真図版 10 土坑(4)	69
写真図版 5 SI 2 積穴住居跡(2)・ 掘立柱建物跡(1)	64	写真図版 11 出土遺物(1)	70
写真図版 6 掘立柱建物跡(2)	65	写真図版 12 出土遺物(2)	71
		写真図版 13 出土遺物(3)	72

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1. 調査経緯

六反田第9次調査は、六反田遺跡内で計画された仙台市立大野田小学校校舎増築計画に伴う埋蔵文化財の事前調査である。東側には大野田官衙遺跡が隣接している。

本遺跡のある大野田地域には、仙台市内でも多くの遺跡が分布しているところである。これまで本遺跡では、地下鉄南北線に伴う発掘調査や、大野田小学校の給食棟建設に伴う発掘調査が行われている。また、平成7年から富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査が継続して行われている。

近年、大野田地区では宅地開発が進み、大野田小学校では児童数の増加がみられることから、校舎の増築工事が計画された。周辺におけるこれまでの調査状況から、計画地内においても古墳時代から平安時代を中心とする遺構、遺物が良好に存在する可能性が極めて高いと予測された。仙台市教育委員会は、学校施設課より、平成23年6月30日付け、「教総施第773号」で提出された「仙台市立大野田小学校校舎増築建設計画と埋蔵文化財のかかわりについて(協議)」(平成23年7月13日付け、教生文第108-4号により県通知を伝達)に基づき、校舎増築工事範囲において、本調査を実施することになった。

2. 調査要項

遺跡名：六反田遺跡(宮城県遺跡番号第01189号)

所在地：宮城県仙台市太白区大野田字六反田10-5

対象面積：約900m²

調査面積：約760m²

調査原因：学校校舎増築計画に伴う発掘調査

調査担当：文化財調査指導係主事 鈴木 隆

文化財調査指導係主事 庄子裕美

調査組織：国際文化財株式会社東北支店

主任調査員 川又理枝

調査員 士 任隆

調査期間：平成23年8月8日～平成23年12月19日

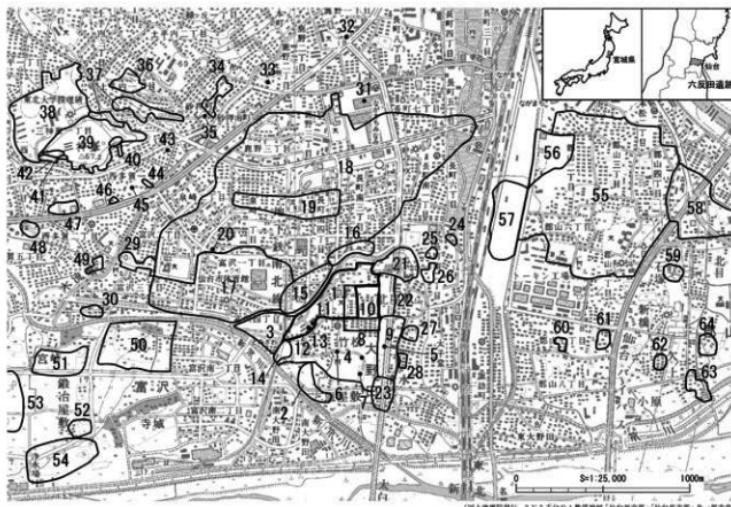
整理期間：平成23年12月20日～平成24年3月23日

第2節 遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

六反田遺跡が位置する富沢・大野田地区は仙台市の南部に位置する。この地区は南縁を名取川、北縁を広瀬川、北西縁を青葉山丘陵によって画された沖積地で、「郡山低地」と呼称されている。富沢・大野田地区には、名取川の支流である笊川など、いくつもの小河川が網目状に且つ蛇行しながら流れしており、自然堤防・旧河道跡・後背湿地などが複雑に入り組んだ地形が形成されている(註1)。六反田遺跡は主に笊川によって形成された標高約10～12m前後の自然堤防上に立地し南西から北東方向への傾斜が認められる(仙台市教育委員会2000b)。遺跡の構成土壤は主に粘土質シルト・シルト質粘土を主体としている。

第2節 遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境



遺跡名	立地	性別	時代	遺跡名	立地	性別	時代
1 六反田遺跡	自然環境 集落跡	鐵文(市-施)-後世		24 伊豫御陵古墳群	自然環境 古墳	後良-平安	
2 伊豫御陵	自然環境 古墳	鐵文(市-施)-後世		30 御陵御陵	自然環境 古墳	古墳	
3 伊豫御陵	自然環境 古墳	鐵文(市-施)-後世		35 御陵御陵	自然環境 古墳	古墳	
4 大原山古墳群	自然環境 古墳	鐵文(市-施)-中世		37 王子塚古墳群	自然環境 古墳	古墳	
5 王子塚古墳	自然環境 古墳	古墳		38 月ノ山古墳	自然環境 古墳	平安	
6 春日井山古墳	自然環境 古墳	古墳		39 三輪古墳群	自然環境 古墳	鐵文	
7 猪飼山古墳	自然環境 古墳	古墳		40 金之山古墳	自然環境 古墳	古墳	
8 大原山古墳群	自然環境 古墳	古墳-平安		41 二輪車古墳	古墳	古墳	
9 王子塚古墳	自然環境 集落跡-星形古墳	鐵文(市-施)-中世		42 豊足御陵	自然環境 古墳	古墳-平安	
10 佐和遺跡	自然環境 古墳	古墳-古墳-平安		43 金洗川古墳	自然環境 古墳	古墳	
11 五反田の墳	自然環境 古墳	古墳		44 直町古墳群	自然環境 古墳	平安	
12 五反田の古墓	自然環境 古墳	古墳		45 旗町古墳	自然環境 古墳	古墳	
13 五反田の古墓	自然環境 古墳	古墳		46 東原古墳群	自然環境 古墳	後良-平安	
14 伊豫御陵	自然環境 集落跡	鐵文-平安		47 信道遺跡	自然環境 古墳	後生-平安	
15 下ノ八幡遺跡	自然環境 集落跡、墓園跡、水田跡	鐵文(市-施)-後世		48 西ノ下町	自然環境 古墳	後良-平安	
16 佐和遺跡	自然環境 古墳	古墳-平安		49 直町上ノ台遺跡	自然環境 古墳	鐵文-平安	
17 山ノ下遺跡	自然環境 古墳	古墳-平安		50 佐野御陵	自然環境 古墳	鐵文	
18 星云遺跡	自然環境 古墳	古墳-近世		51 鶴見御陵古墳群	自然環境 古墳	鐵文-後良-中世	
19 望崎遺跡	自然環境 古墳	古墳-後生-平安		52 鶴見御陵古墳群	自然環境 古墳	鐵文-平安	
20 舞古古墳	自然環境 古墳	古墳		53 南ノ上遺跡	自然環境 古墳	後生-平安	
21 元気遺跡	自然環境 古墳	古墳-平安		54 六本松古墳	自然環境 古墳	平安	
22 大原山古墳	自然環境 古墳	鐵文(市)-後生(中)-古墳-平安		55 岩山古墳	自然環境 古墳	後良-近世	
23 植野敷遺跡	自然環境 古墳	後生-平安		56 西台古墳群	自然環境 古墳	鐵文(市)-後生(中)-古墳-近世	
24 長町六丁目遺跡	自然環境 古墳	古墳-平安		57 直町御陵遺跡	自然環境 古墳	後生-中世	
25 石和山古墳	自然環境 古墳	古墳-平安		58 長月古墳	自然環境 古墳	鐵文(市)-後生-近世	
26 新町遺跡	自然環境 古墳	古墳-平安		59 木東御跡	自然環境 古墳	後生-平安	
27 北丸敷遺跡	自然環境 古墳	古墳-平安		60 の月御跡	自然環境 古墳	後良-平安	
28 石和山古墳	自然環境 古墳	古墳-平安		61 施ノ御跡	自然環境 古墳	後生-平安	
29 石和山古墳	自然環境 古墳	古墳-平安		62 天ノ上ノ遺跡	自然環境 古墳	後生-中世	
30 稲ノ山古墳	自然環境 古墳	古墳-平安		63 天ノ上ノ遺跡	自然環境 古墳	古墳-平安	
31 金洗川古墳	古墳	後生-古墳		64 天ノ上ノ遺跡	自然環境 古墳	後生-近世	
32 一柳古墳	古墳	古墳					
33 一柳古墳	古墳	古墳					

第1図 六反田遺跡の位置と周辺遺跡分布図

2. 歴史的環境

1976 年に開始された六反田遺跡の発掘調査は、今回の調査で第 9 次を数える。これまでに行われた周辺の調査によって、名取川が形成した自然堤防と後背湿地の変化に伴う土地利用の変遷が明らかになってきている。縄文時代 箕川流域の自然堤防上に生活が営まれていたことが確認されている。六反田遺跡では中期中葉の堅穴住居跡が確認されている。また六反田遺跡から下ノ内遺跡の一帯では中期後葉から後期初頭の集落が確認されている。

弥生時代 中期には箕川対岸の後背湿地に水田が営まれている。後背湿地から自然堤防への移行域に立地する山口遺跡、下ノ内浦遺跡では遺物包含層が形成されている。今回の調査では調査区北側で中期から後期の遺物が出土した。

古墳時代 前期の住居跡は下ノ内遺跡・伊古田遺跡・六反田遺跡で確認され、中期には大野田古墳群として知られる古墳群が東側一帯に形成されている。六反田遺跡第 1 次調査では木棺墓・石棺墓が確認されている。

奈良時代 山口遺跡、下ノ内浦遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡一帯で集落跡が営まれている。六反田遺跡では今回の調査の南西に位置する第 1・3・4 次調査、北東に位置する第 2・5 次調査において奈良時代の堅穴住居跡が確認され、今回の調査においても同時期の堅穴住居跡を確認している。

平安時代 箕川右岸の微高地全域で集落が営まれている。箕川対岸の富沢遺跡では 10 世紀前半以降の水田跡が全域で確認されている。六反田遺跡第 2 次調査では乾田が確認され、南西の第 1・3・4 次調査、北西の第 5 次調査においては平安時代の堅穴住居跡が確認されている。箕川対岸の山口遺跡では平坦時代末葉の河川跡が確認されている。また耕作に伴って残されたと考えられる「小溝状遺構」はこれまで遺跡内のほとんどの調査地において確認されており、自然堤防を生産域として利用した人々の生産活動を知る上で、貴重な成果が得られている。

なお、六反田遺跡範囲の東側は、平成 21 年度に新たに遺跡登録がなされた「大野田官衙遺跡」とその遺跡範囲を一部共有しており、遺跡の東約 1.5km に位置する国指定史跡「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山庵寺跡」とも密接な関係を有していたと考えられる遺構群が確認されている。

第 3 節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査は現在の盛土層を重機により除去する事から始めた。基本層Ⅲ a 層直上までを重機により除去し、以下の層を人によって調査を行った。調査区周囲の西側と南側には土層観察と排水を兼ねた側溝を掘り、基本層序の確認を行った。遺構確認面では平面の計測・写真撮影を行い、側溝で断面の土層堆積状況を観察、計測・写真撮影を行った。

調査で設定したグリッドは隣接する「仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業」事業地内の測量基準点(日本測地系: X = -198,400km・Y = 3,900km)を原点とする 10m × 10m グリッドを基準とした(第 3 図)。遺構平面図は、トータルステーションを使用して計測し、断面図はトータルステーションとデジタルカメラを用いた写真実測を行い、一部手実測による計測・図化を併用した。

出土遺物は出土年月日順に番号をつけ、遺構別、層位別に取り上げ、登録を行った。出土遺物のうち報告書掲載資料及び観察資料に関しては、新たに遺物登録番号を付した。遺物の実測に関しては、手実測で作成した。

2. 調査の経過

調査は 8 月 29 日から表土掘削を開始し、基本層Ⅲ a 層上面検出遺構の調査を 9 月 9 日～9 月 28 日に、基本層Ⅴ 層上面検出遺構の調査を 9 月 29 日～12 月 9 日にかけて行った。その後基本層 XI 層上面までの下層トレンチ調査を 3 か所の試掘坑を設定して行い、12 月 27 日の埋戻し終了をもって現地調査の全工程を終了した。

第3節 調査の方法と経過

3. 普及活動について

六反田遺跡第9次調査の調査地点は、仙台市立大野田小学校の敷地内である。本調査において、文化財課は学校の授業と連携し、小学校4～6年生と教職員、保護者を対象とした遺跡見学会を計画した。そのうち、4年生の児童については、遺跡見学会を行う前に、総合的な学習の授業の一環として9月8日に出前授業を行った。また、学校の希望により、遺跡見学会に先立ち、発掘調査の様子や小学校周辺に所在する遺跡について、校内テレビ放送で写真パネルなどを用いて説明を行った。

10月31日には4年生と教職員を対象に、11月1日には5・6年生と保護者を対象に遺跡見学会を実施した。遺跡見学会では、本調査で検出した竪穴住居跡について担当者から説明、地層についての説明、六反田遺跡から出土した土師器、須恵器について説明をし、出土した遺物の観察を行った。遺跡見学会に参加した児童は342人、教職員と保護者は45名である。



遺物観察の様子



遺跡見学会

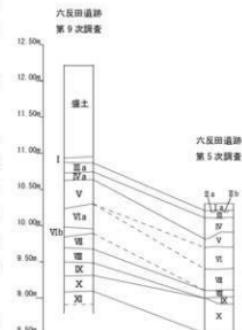
第2章 基本層序

基本層は、層厚140～160cmの現代の盛土下にI層からXI層を確認し、当該調査区の基本層序として大別した。このうちI層～V層は、大野田地区で実施された六反田遺跡第5次調査（仙台市教育委員会2000b）の基本層I層～V層と対応するが、これらの層については大野田地区全体で実施されている仙台市富沢駅周辺地区画整理事業関係遺跡の基本層I～V層に対応するとされる（仙台市教育委員会2000b・2011b）。

今回の調査では、調査区東側にかかるSI1竪穴住居跡上層の堆積状況からIII層を分層している。

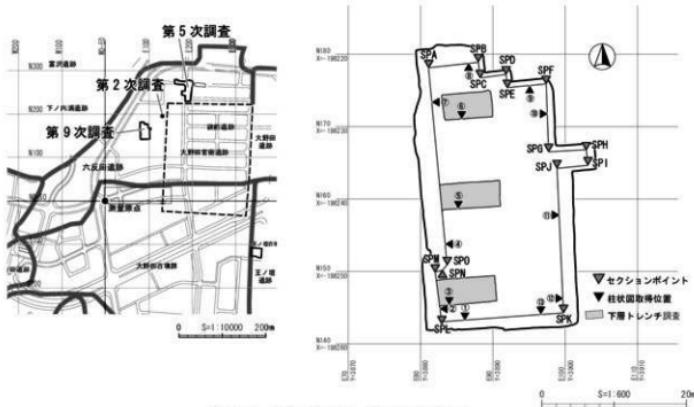
VII層以下は下層トレンチ調査で確認した。六反田遺跡第5次調査と、今回の調査の基本層で大きく異なる層はVI層である。六反田遺跡第5次調査のVI層は暗褐色の粘土質シルトとされ、今回の調査では確認されなかった層である。この層以下では土質や混入物・出土遺物など、土層に見られる特徴が少なく対応関係がやや不明瞭である。また大野田小学校給食棟の増改築に伴い実施された六反田遺跡第2次調査（仙台市教育委員会1984b）の基本層とは、一部対応することが可能である。

基本層の対応関係については、基本土層注記表（第1表）において六反田遺跡第5次調査（前掲）の発掘調査における基本層および、六反田遺跡第2次調査（前掲）における基本層との対応関係を示した。以下、各層の特徴について記載する。

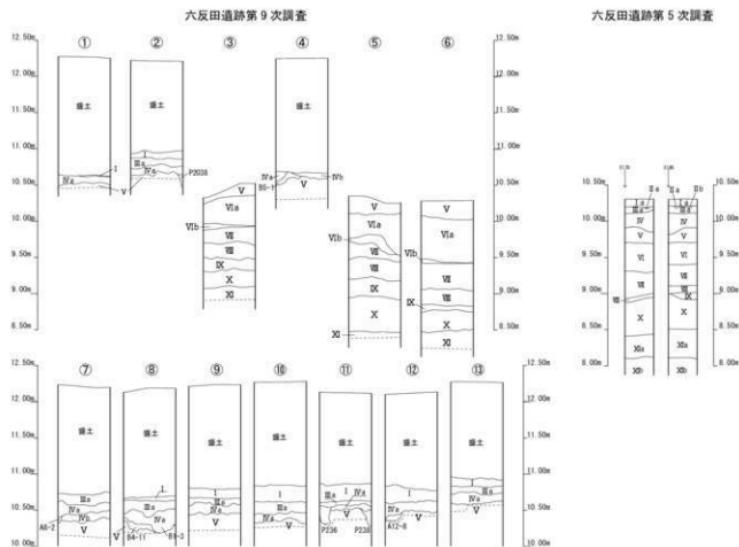


第2図 六反田遺跡基本層対応模式図

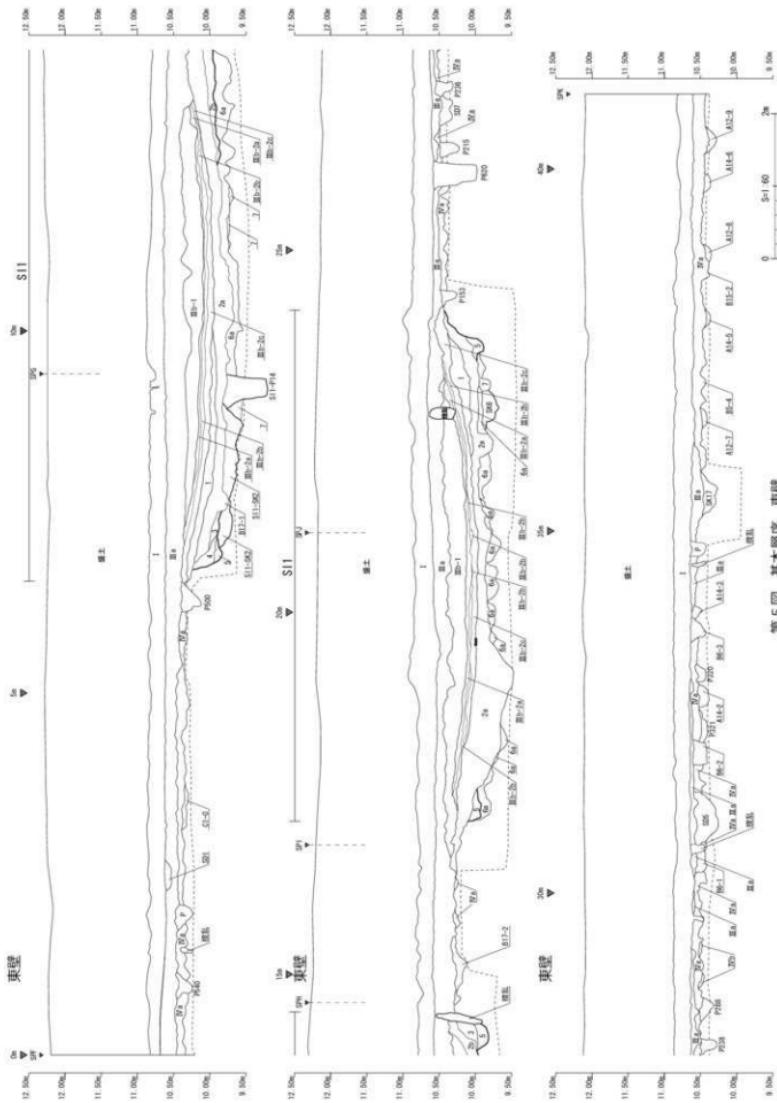
- I 層： 2.5Y6/2（灰黄色）シルト
近代～現代の水田耕作土で層厚 10～30cm である。上面は盛土時に削平されている箇所があるが、調査範囲全域で確認される。下位には酸化鉄が集積する。
- II 層： 今回の調査では確認できなかったが、六反田遺跡第5次調査では黒褐色～褐灰色の粘土質シルトを主体とする細別2層が確認されている。
- III 層： 今回の調査ではⅢ a・Ⅲ b の2層に分層される。
Ⅲ a 層：10YR4/1～10YR4/2（褐灰色～灰黄褐色）粘土質シルト
上面はマンガンが集積し、下面是起伏がみられる。層厚は 10～50cm である。六反田遺跡第2次調査および六反田遺跡第5次調査では平安時代の水田耕作土が検出されている。上面は 10世紀初頭以降の遺構確認面である。
Ⅲ b 層：調査区東側のSI1 穴空住居跡の上層に堆積しているⅢ層を、堆積状況から小溝状遺構 D 群の耕作土と考えられるⅢ b-1 層と、灰白色火山灰を含むⅢ b-2 層に細別した。Ⅲ b-1 層は 10YR3/2(黒褐色) の粘土質シルト層である。10YR4/2（灰黄褐色）粘土質シルト、10YR5/4（にぶい黄褐色）粘土質シルトをブロック状に含み、下面是やや起伏している。
Ⅲ b-2 層は 10YR4/2（灰黄褐色）のシルト質粘土層で、レンズ状に堆積する。灰白色火山灰を斑状に含むⅢ b-2a 層、層中に含むⅢ b-2b 層、あまり含まないⅢ b-2c 層に細別される。
- IV 層： 10YR3/2（黒褐色）粘土質シルト
南側でマンガン粒を多く含む。IV a 層・IV b 層の2層に細別されるが、土質に明瞭な差は認められない。いずれも下面是大きく起伏し、耕作土と考えられる。IV a 層の層厚は 10～30cm。IV b 層は IV a 層に伴う耕作の影響で残存しない箇所が多く、IV a 層の耕作が及ぼなかつた範囲として 5～10cm 程が途切れがちに確認された。六反田遺跡第2次調査における 8 層（奈良時代の遺構確認面）に相当すると考えられる。
- V 層： 10YR5/4（にぶい黄褐色）シルト質砂～細粒砂 自然堆積層
酸化鉄を斑状に含み、北側ではグライト化がすんでいる。層厚は 10～30cm である。下面の標高は南側がやや高く、上面は古代の遺構確認面である。六反田遺跡第2次調査における 9 層に相当する。
- VI 層： 10YR5/4（にぶい黄褐色）細砂～粗砂 自然堆積層
細砂を主体とする VI a 層と、小礫をやや多く含む VI b 層とに細別される。南側では層厚 10～30cm である。北側では 50cm 程に層厚を増し、粘土や小礫などがブロック状に混入する。VI a 層からは縄文土器片（後期末葉～晩期初頭）が 1 点出土している。土層の特徴から六反田遺跡第5次調査のVII 層に相当すると考えられる。
- VII 層： 10YR4/2（灰黄褐色）シルト質粘土 自然堆積層
層厚は 30～40cm である。
- VIII 層： 2.5Y4/2（暗灰黄色）細砂 自然堆積層
炭化物を微量含む。層厚は 25cm～40cm である。縄文土器（後期）細片が 1 点出土している。六反田遺跡第5次調査における VIII 層に相当する。
- IX 層： 2.5Y4/2～4/3（暗灰黄色～オリーブ褐色）粘土 自然堆積層
細砂を多く含み、炭化物を微量含む。層厚は 15～30cm である。
- X 層： 2.5Y3/2（黒褐色）粘土 自然堆積層
炭化物を少量含む。層厚は 20～40cm である。X 層下面は縄文時代の土器細片が出土しているが、小片のため遺物の時期は不明である。
- XI 層： 2.5Y4/2（暗灰黄色）細粒砂 自然堆積層
下位は砂質シルトで、調査範囲北側では礫をやや多く含む。



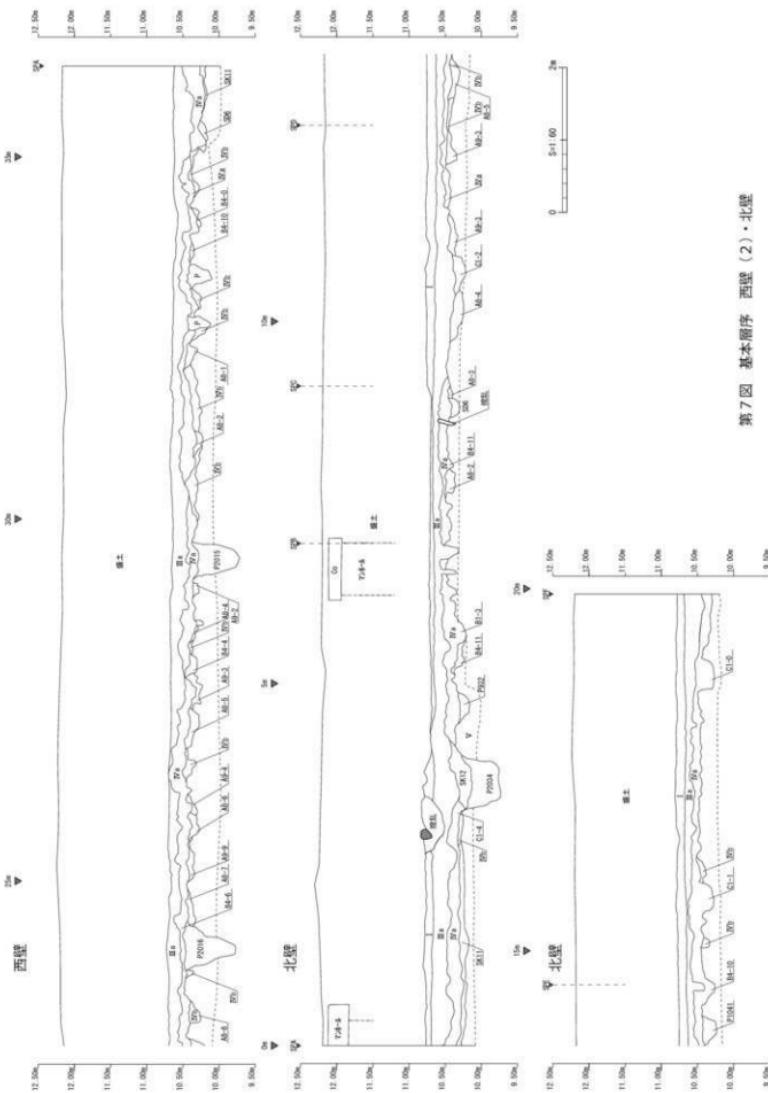
第3図 調査区位置図・グリッド配置図



第4図 基本層序柱状図







第7图 基本概念 土壁(2)·北壁

第2章 基本層序

基本層 調査区断面土層注記表

部位	層別	土色	土性	備考	六四〇断面 計5.5m	八四〇断面 計2.9m
I		2.5Y6/2	灰褐色	シルト	砂を含む多く含む。層の下は黒褐色が集積している。	I
Ⅲ	a	10W4/1 - 10W4/2	褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黒褐色シルトを多く含む。3.5Y3/4 オリーブ褐色粘土質シルトをやや多く含む。層上部にマンガンが付着する。	
	b-1	10W5/2	黒褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 オリーブ褐色粘土質シルトをやや多く含む。3.5Y3/4 黑褐色粘土質シルトを少々含む。黒化鉄斑塊。	
	b-2a	10W4/2	灰褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色シルトを含む。3.5Y3/2 黑褐色粘土質シルトを部分的に層に含む。	III
	b-2b	10W4/2	灰褐色	シルト	2.3Y3/2 黑褐色シルトを含む。	
	b-2c	10W4/2	灰褐色	シルト質粘土	2.3Y3/2 黑褐色シルト + 10W5/4 黑褐色シルト質粘土をやや多く含む。	
N'	a	10W3/2	黒褐色	粘土質シルト	10W5/4 に「黒褐色粘土質シルト」で2つロットを含む。	IV
	b	10W3/2	黒褐色	粘土質シルト	10W5/4 に「黒褐色粘土質シルト」で2つロットを含む。	V
V		10W5/4	灰褐色	シルト質粘土	10W5/4 に「黒褐色粘土質シルト」で2つロットを含む。	V 9
VI	a	10W5/4	灰褐色	シルト質粘土	砂を多く含む。淀文土層(施用土層・廃耕田層)出土。	
	b	10W5/4	灰褐色	シルト質粘土	砂 - 和葉を多量。小礫をやや多く含む。	
Ⅶ		10W4/2	灰褐色	シルト質粘土	前述物質を含む。淀文土層(施用土層)出土。	
Ⅷ		2.5Y1/2	前葉樹	細粒	前述物質を含む。淀文土層(施用土層)出土。	
IX		2.5Y1/2 - 2.5Y1/3	前葉樹	粘土	前述物質を含む。淀文土層(施用土層)出土。	
X		2.5Y1/2	黒褐色	粘土	前述物質を含む。淀文土層(施用土層)出土。	
XI		2.5Y1/2	田園褐色	粘土質シルト	砂を多く含む。	

S1 住居跡 調査区断面内土層注記表

部位	層別	土色	土性	備考	
	1	2.5Y5/2	灰褐色	粘土質シルト	10W4/1 黒褐色粘土質シルト + 2.5Y3/4 黑褐色粘土質シルトを含む。
住居跡土	2a	2.5Y5/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10W4/1 黒褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	2b	2.5Y5/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	2c	2.5Y5/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	2d	2.5Y5/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	2e	2.5Y5/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
雨道	5	2.5Y5/2	暗褐色	粘土	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	6a	2.5Y5/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	6b	2.5Y5/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
掘り方	7	2.5Y5/4	黃褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。

S2 住居跡 調査区断面内土層注記表

対応剖面	部位	層別	土色	土性	備考
	1	10Y6/2	黒褐色	粘土質シルト	10W4/1 黒褐色粘土質シルト + 2.5Y3/4 黑褐色粘土質シルトを含む。
	2	10Y5/2	黒褐色	粘土質シルト	10W4/1 黑褐色粘土質シルト + 2.5Y3/4 黑褐色粘土質シルトを含む。10W5/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	3a	10Y6/2	灰褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。10W6/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	3b	10Y6/2	灰褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。10W6/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	4a	10Y6/2	灰褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	4b	10Y6/2	灰褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	5	7.5Y5/2	灰褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	6a	2.5Y5/3	暗褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	6b	2.5Y5/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	7	2.5Y5/3	暗褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	8	2.5Y5/1	灰褐色	粘土	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	9	10Y8/1	灰褐色	粘土	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	10	10Y8/1	灰褐色	粘土	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	11	2.5Y5/4	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。10W5/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。
	12	2.5Y5/2	暗褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	13	7.5Y5/2	暗褐色	粘土質シルト	10W5/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	14	10Y8/1	灰褐色	粘土	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	15	10Y8/1	灰褐色	粘土	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを含む。
	16	2.5Y5/2	黄褐色	粘土質シルト	2.3Y3/2 黑褐色粘土質シルトを少々含む。

第1表 調査区断面注記表

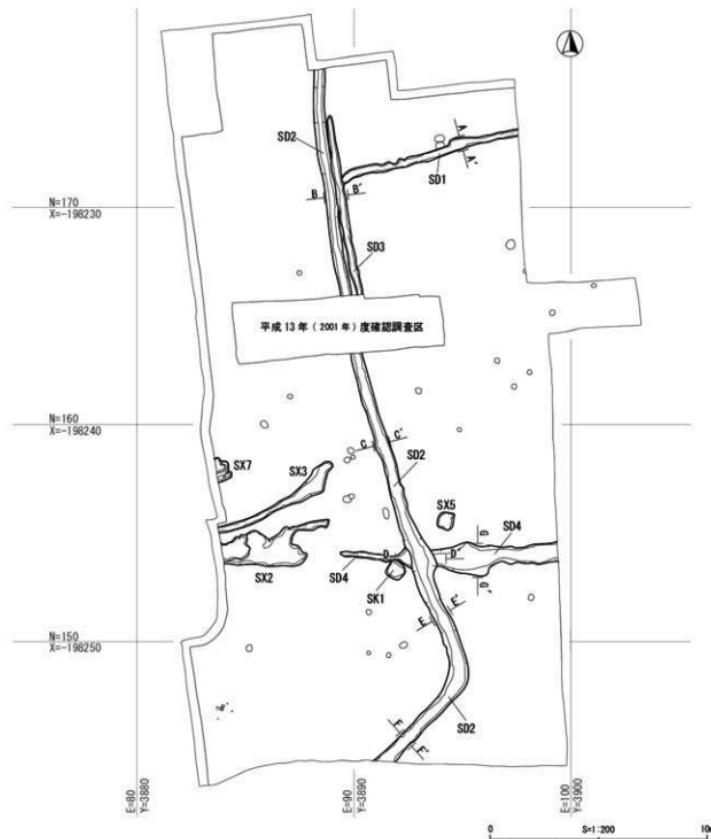
第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 III a 層上面検出遺構

III a 層上面では層上位のマンガン集積層直下を遺構確認面とし、遺構検出作業を行った。III a 層の確認面標高は南西が最も高く 10.80m 前後であり、東北が最も低く 10.50 ~ 10.60m であった。一方、調査区南東では III a 層は確認されず、I 層直下で暗褐色粘土質シルトの IV a 層上面が確認されている。このように、III a 層の上位層が近現代の水田耕作土であること、そのため本来の III a 層上面が残存していない可能性が高いことなどから、本項で扱う各遺構の正確な帰属時期は不明であるが、いずれも灰白色火山灰の降灰後の堆積

層中で検出されていることから、10世紀初頭以降の遺構と考えられる。

確認された遺構は溝跡4条（SD 1～4）、土坑1基（SK 1）、性格不明遺構4基（SX 2・3・5・7）である。このうち、溝跡に関しては六反田遺跡第2次調査で平安時代の水田耕作土が確認されているため、水田区画に伴う溝跡の可能性も考えられる。土坑は遺構確認時に4基を確認したが、調査の結果 SK 1のみを土坑として認定した。性格不明遺構は SX 1～8を確認したが、SX 2とSX 4・SX 7とSX 8はそれぞれ同一の遺構であることから、SX 2、SX 7を遺構として認定した。また調査区南西端のⅢ a 層中で遺物がまとまりを持って出土した範囲を SX 1 および SX 6としたが、遺構プランが確認できなかったことから、遺物出土分布図として第15図に示した。このため、SK 2～4、SX 1・4・6・8が欠番となっている。



第8図 Ⅲ a 層上面遺構配置図

第1節 III a 層上面検出遺構

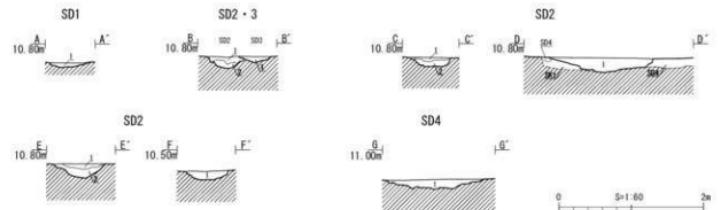
1. 溝跡

(1) SD 1溝跡（第8・9図、図版1） N171～173・E89～97 グリッドで検出した。SD 3と重複関係にあり、本遺構が古い。検出した長さは8.5mを測り、東端は調査区外へ延びる。主軸方向はE-15°-Nである。規模は幅36～55cm、深さ2～5cmで、断面形は浅い皿型である。傾斜方向は明確には捉えられなかった。堆積土は1層で灰白色火山灰の薄層が観察される。遺物は土師器壺の細片が出土している。

(2) SD 2溝跡（第8・9図、図版1） N144～176・E88～95 グリッドで検出した。SD 3・4と重複関係にあり、SD 3より古くSD 4より新しい。溝の形状は緩いカーブを描くL字状で、検出した長さは34mを測るが、北端・南端ともに調査区外へ延びる。主軸方向は北側でN-13°-W、南側でE-46°-Nである。溝の規模は幅52～98cm、深さ10～25cmで、断面形は浅い皿型である。傾斜方向は明確には捉えられなかった。堆積土は2層で、1層と2層の層離面には灰白色火山灰の薄層が観察される。遺物は土師器壺・甕・須恵器の細片が出土している。

(3) SD 3溝跡（第8・9図、図版1） N166～174・E88～90 グリッドで検出した。SD 2と重複関係にあり、本遺構が新しい。検出した長さは8.3mを測り、南端は削平される。主軸方向はN-10°-Wである。規模は幅28～43cm、深さ10～20cmで、断面形は浅い皿型である。傾斜方向は明確には捉えられなかった。堆積土は2層で、1層と2層の層離面には灰白色火山灰の薄層が観察される。遺物は須恵器壺・蓋・甕細片が出土している。

(4) SD 4溝跡（第8・9図、図版1） N153～154・E89～99 グリッドで検出した。SD 2、SK 1と重複関係にあり、本遺構が古い。検出した長さは10mを測るが、東端は調査区外へ延びる。主軸方向はE-0°～1°-Nである。規模は幅22～134cm、深さ10～15cmで、断面形は浅い皿型である。傾斜方向は明確には捉えられなかった。堆積土は1層である。遺物は土師器壺・甕細片・須恵器甕細片が出土している。



SD 1溝跡 土層注記表

遺構	層位	土色	土性	参考
SD 1	1	2.3VS/3	黄褐色	砂質シルト 灰白色火山灰を微量含む。鈍化鉄斑斑状。
SD 4 溝跡 土層注記表				
遺構	層位	土色	土性	参考
SD 4	1	2.3VS/1	黄灰色	砂質シルト 灰白色火山灰を微量含む。鈍化鉄斑斑状。

SD 2・3 溝跡 土層注記表

遺構	層位	土色	土性	参考
SD 2	1	2.3VS/1	黄灰色	砂質シルト 鈍化鉄斑斑状。
SD 3	1	2.3VS/1	黄灰色	砂質シルト 鈍化鉄斑斑状。

第9図 SD 1～4溝跡断面図

2. 土坑

(1) SK 1土坑(第10図) N152～153・E91～92 グリッドで検出した。SD 4と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は不整円形で、規模は長軸・短軸とともに95cm、深さ5～10cmを測る。断面形は皿状で、壁面は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。堆積土は2層である。遺物は出土していない。



第10図 SK 1 土坑平面図・断面図

3. 性格不明遺構



第11図 SX 2 性格不明遺構平面図・断面図

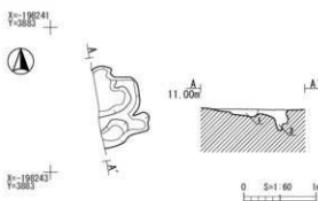


第12図 SX 3 性格不明遺構平面図・断面図



第13図 SX 5 性格不明遺構平面図・断面図

第1節 III a 層上面検出遺構



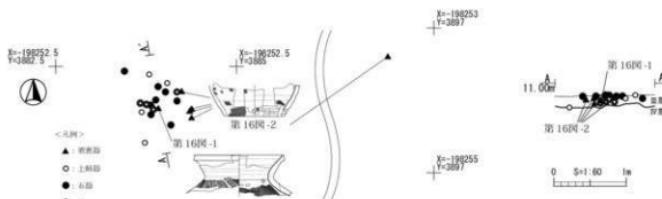
第14図 SX 7性格不明遺構平面図・断面図

(5) SX 7 性格不明遺構(第14図) N157～158・E83～84 グリッドで検出し、西側の調査区外へ延びる。平面形は不整形と思われ、規模は長軸110cm、短軸70cm、深さ10～30cmである。断面形は皿状で、底面は起伏する。堆積土は2層で、遺物は出土していない。

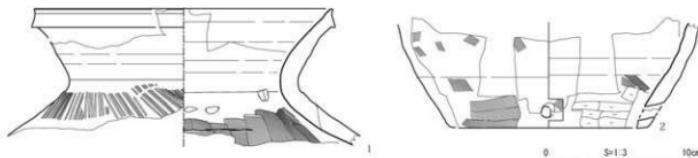
遺構	部位	土色	土性	備考
SX 7	1	SY5/1	褐色	粘土質シルト 層下部に焼成跡多発。
	2	SYR4/2	灰褐色	粘土質シルト 焼成跡無。

4. 遺構外出土遺物

(1) III a 層遺物出土範囲(第15・16図、図版11) 調査区南西のN146～148・E83～85 グリッド周辺の基本層III a 層中では遺物がまとまって出土した。須恵器の破片、非クロコ土師器壺の破片、石器、被熱した礫等が出土したが、遺物に伴う明瞭なプランは確認できなかったため、出土位置を平面図と垂直分布図として示した。これらの遺物のうち、須恵器表1点と須恵器底1点を第16図に図示した。1は須恵器表である。外側へ張り出す肩部から頸部へ直角に近い角度で屈曲し、緩やかに外反して口縁部へいたる器形である。口唇部は面を持ち、外面側がわずかに垂下する。外面肩部に平行タキ目が、内面にはヘラナデによる調整痕が観察される。2は壺の体下半から底部と推測される。底部下端付近に焼成前に施された穿孔を四方に有すると推測される。調整は、外面にヘラナデ、内面はヘラナデ後、胸部下端付近でヘラケズリが施された痕が観察される。



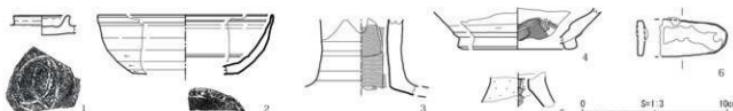
第15図 III a 層遺物出土分布図



図版番号	登録番号	出土位置	種別	器種	部位	法量(cm)	外表面	内表面	備考	写真図版	
16-1	E-001	N147 E84	グリッド	遺構	部位	口径 底径 高さ	口縁 底盤 斜面	(9.5) 9.5 9.5	口縁～斜面に凹凸の割れ。斜面 平行タキ目	内面に工具 ヘラナデ	11-1
16-2	E-002	N147 E85	—	遺構	裏	幅下平～底	(13.7) (7.2)	口縁～斜面 ヘラナデ	内面に工具 ヘラナデ～底下邊(ヘラケズリ)	11-2	

第16図 III a 層出土遺物(1)

(2) その他の出土遺物(第17図、図版11) 基本層Ⅲa層では、土師器片313点、須恵器片58点の他、縄文土器・弥生土器の破片、石器などが出土している。土師器は主として非クロロ整形の壺・甕の破片であり、クロロ土師器は細片1点のみの出土であった。須恵器は甕の破片が37点とやや多い。出土遺物の中から須恵器4点と、土師器1点、金属製品1点を第17図に図示した。1は須恵器蓋の凹状摘み部分である。内面に當て具痕が観察される。2は須恵器杯である。底部を欠損する。体部下半から口縁部に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部と体部との境に段を有し、内面体部下半には沈線状の稜を有する器形である。調整は、外面部下半から底部外周に回転ヘラケズリ整形が施される。3は須恵器長頸瓶の頸部である。口縁及び体部を欠損しており全体の形状は不明である。ロクロ調整で、内面付け根部分にヘラケズリ、頸部にヘラナデを施された痕跡が観察される。4は須恵器の壺の底部と推測される。口縁から体部上半は欠損しており全体の器形は不明である。調整は、外面部体部にロクロ調整後下端に回転ヘラケズリ、底部高台貼付け後ナデが施される。内面はロクロ調整後ナデが施され、下端の一帯に自然釉が付着する。5は土師器器台の脚部付け根の破片である。受け部及び脚部下半は欠損するため全体の器形は不明である。調整は、外表面は摩滅のため判然としない。内面はヘラナデが施され、わずかにヘラミガキの痕跡が観察される。6は刀子の柄の一部である。



図版番号	登録番号	出土位置	種別	器種	部位	法量(cm)		外面部調整	内面部調整	備考	写真版		
						口径	底径						
17-1	E-003	N161 E89	—	須恵器	蓋	つまみ	—	—	4.4	ロクロ調整	ロクロ調整、あて目皿	自然釉付、内型つまみ	11-3
17-2	E-009	N157 E97	—	須恵器	片	口縁一休厚	(12.0)	—	(4.5)	ロクロ調整、体下ハクズリ	ロクロ調整	—	11-4
17-3	E-006	N153 E88	—	須恵器	口縁部	瓶頸	—	—	(3.1)	ロクロ調整	ロクロ調整、ヘラナデ、底曲面: ハクズリ	—	11-5
17-4	E-004	N156 E95	—	須恵器	口縁部	瓶底	—	(2.2)	(2.8)	ロクロ調整、下端: 回転ヘラケズリ→高台張付	ロクロ調整、下端ヘラナデ	内面の一部に物が残存	11-6
17-5	C-001	N156 E94	—	須恵器	脚付	受け部	丸底	(1.4)	(2.4)	ヘラナデ	ヘラナデ、ヘラミガキ	内外面摩滅	11-7
図版番号	登録番号	出土位置	種別	器種	部位	法量(cm)		重量	備考	写真版			
						全長	幅						
17-6	N-001	N149 E98	—	須恵器	金属製品	刀子	18.5	12.5	10.0	20.3	納の一部 刃部欠損	—	11-8

第17図 III a層出土遺物(2)

第2節 V層上面検出遺構

基本層V層は自然堆積層であり、上面は基本層IV層に伴う耕作痕や遺構掘り方等による凹凸が見られる。このため層上面の標高は一定ではないが、おおよそ南から北に下り傾斜する傾向がうかがえる。このうち南西が最も高く標高10.65m前後であり、北西が最も低く標高10.28m前後である。一方、東側の標高は北東で10.45m前後、南東で10.40m前後で南北間の高低差はあまり無い。標高値の高い南西ではN147-E83グリッド付近のⅢa層中では遺物がまとまって出土しており、N146ライン以南のⅣa層中でも多くの遺物が出土した。このため検出面をⅣ層が残存する高さに設定し、小溝状遺構の調査を行なった後、確認面を下げて下位の遺構SI2の検出作業を行なった。V層上面では小溝状遺構17群、溝跡2条、土坑17基、性格不明遺構1基、堅穴住跡2軒、掘立柱建物跡7棟の他、多数のビットを検出した。検出した遺構については他の遺構との重複関係の観察から、大別9期に区分されることが明らかとなったが、これについては第4章で述べる。

以下、検出された遺構と遺構内出土遺物について、遺構の種別ごとに報告する。

1. 穫穴住居跡

V層上面では2軒の竪穴住居跡SI 1・SI 2を検出した。SI 1は調査区中央東側に位置し、SI 2は調査区南端に位置する。ともに調査区内で遺構の全範囲を確認することはできなかった。V層上面で検出した遺構の中で最も古い時期に属する遺構である（第3章第2節参照）。以下、各竪穴住居跡について個別に記載する。

(1) SI 1竪穴住居跡（第19～23図、図版3・4・11）

【位置・確認】調査区中央東側N161～170・E94～103で、竪穴住居跡全体の2/3程を検出した。北東部および南東部の隅は調査区外に延びる。床面は1面であるが、柱の建て替えが行われている。

【新旧関係】小溝状遺構B17群・C3群・D2群と重複関係にあり、本遺構が古い。

【規模・形態】検出した規模は、南北約8.5m、東西約8mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。

【主軸方位】西壁基準でN=6～7°Wである。

【堆積土・構築土】大別7層に分層した。1～4層は住居内堆積土である。堆積土上位には住居跡の凹地に堆積したⅢb-1層と灰白色火山灰を含むⅢb-2層がある。Ⅲb-2層は灰白色火山灰の堆積状況からⅢb-2a～Ⅲb-2c層に細別される。住居堆積土である1層は、レンズ状に堆積しており、下面是起伏していない。2層は2a～2d層まで細別することができる。2a層は黄褐色粘土質シルトをブロック状にやや多く含む層で、小溝状遺構B17群の耕作土である。住居床面にこの小溝状遺構の掘り方が部分的に確認されている。3層は床面直上の堆積土で、4層は住居壁際に堆積している。5層は周溝内堆積土であり、6～7層は掘り方である。6層は暗褐色系の粘土質シルトのブロックを多く含み、焼土・炭化物等を多く含む層を6b層として細別した。

【壁面】やや外傾しながら、緩やかに立ち上がっている。壁際の堆積土の状況から、壁材を立てたのちに掘り方との間を埋め戻し、壁面を構築している状況が確認できる部分がある。壁面の一部を小溝状遺構B17群に削平される。残存する壁高は、北西で45cm前後、南西で45～50cm前後、東側で30cm前後を測る。

【床面】ほぼ平坦だが、住居の南壁際と東壁際では床面がやや高くなり、5～10cmの高低差を生じる。

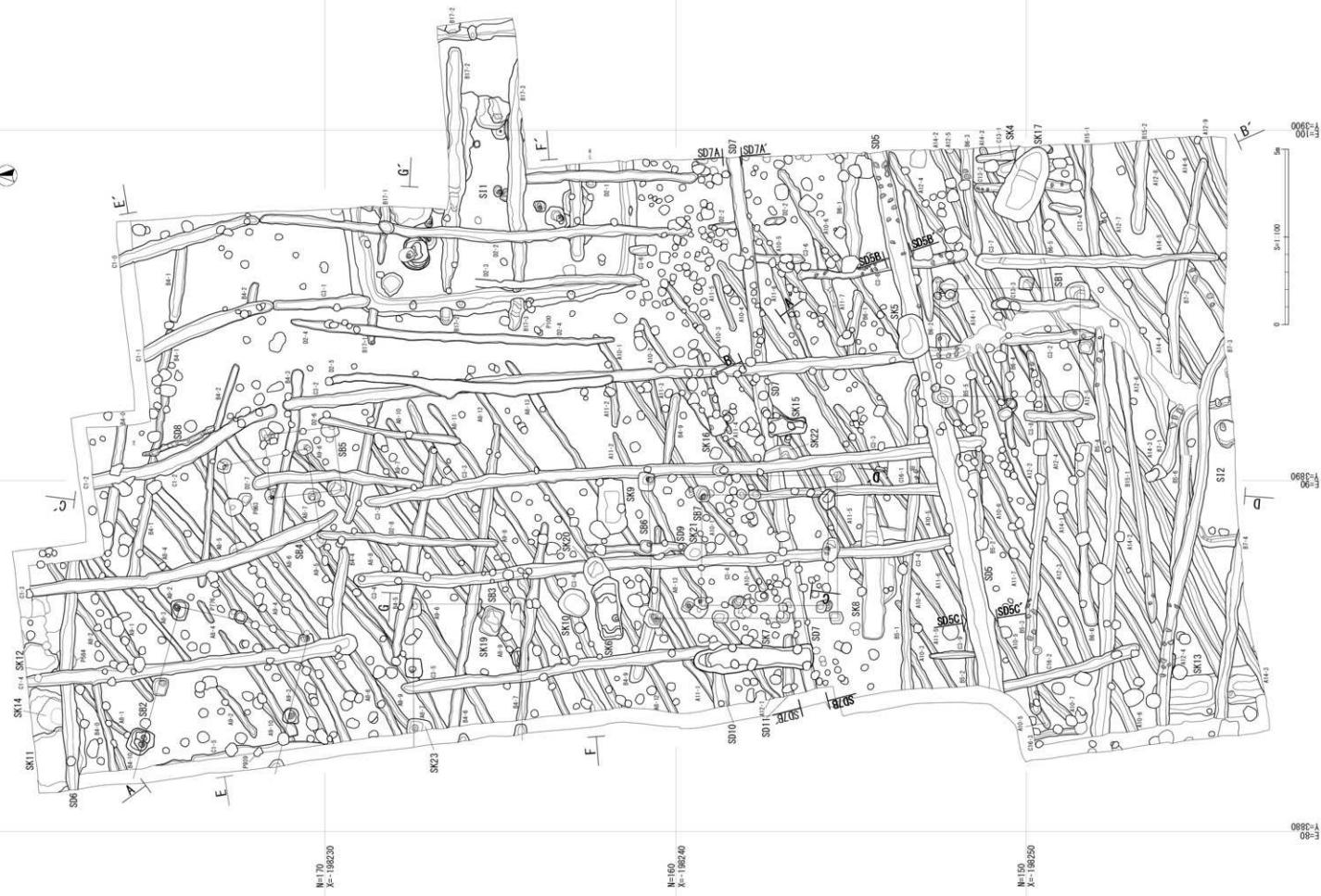
【柱穴】P 1～P20を確認した。P 1～P 6は床面で確認し、P 7～P14は掘り方調査中に確認した。柱穴の重複状況等から、柱の建て替えが行われたと考えられる。

主柱穴はP 1・P 4・P 5・P 7が相当し、P 1・P 4は新段階の主柱穴、P 5・P 7は古段階の主柱穴と考えられる。

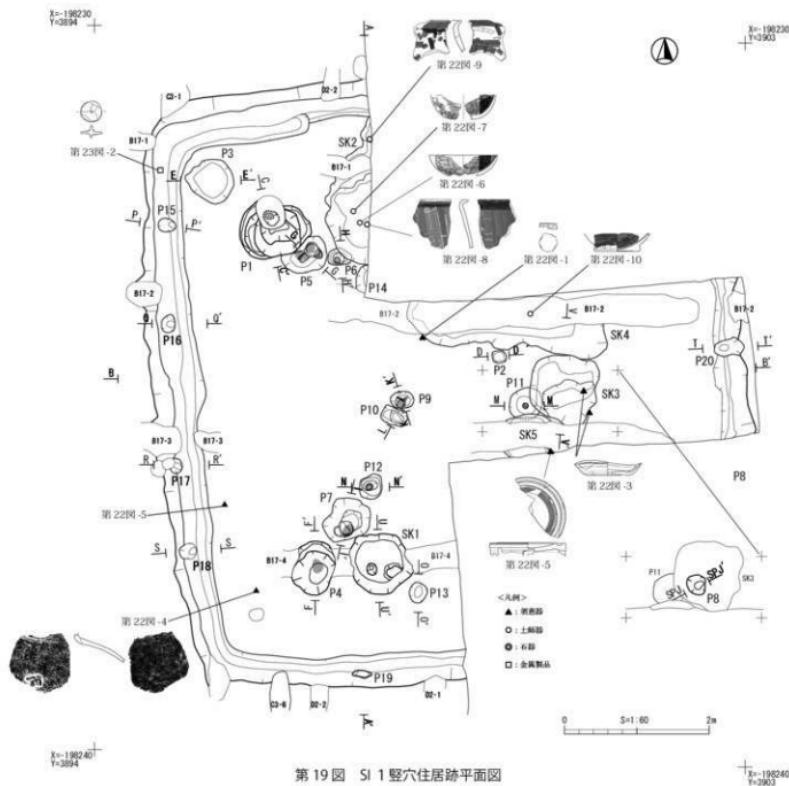
P 1は北西の主柱穴で、規模は長軸約100cm、短軸約84cm、深さ約100cmを測る。底面で柱痕跡を確認しているが、柱は抜き取られた跡があり住居内堆積土2層に類似する堆積土が混入する。P 4は南西の主柱穴で、規模は長軸約60cm、短軸約55cm、深さ約62cmを測る。上部を小溝状遺構C17群に削平されるが、柱痕跡が残存している。P 5は北西の古段階主柱穴で、柱穴の北西でP 1と重複する。残存する規模は長軸64cm、短軸45cm、深さ約83cmを測る。底面には径10cm前後、深さ5cm程度の凹みが確認され、柱痕跡と考えられる。柱痕跡は、円形に変色した箇所も含め3箇所確認されており、複数回の建て替えが行われたと考えられる。柱は抜き取り後、埋め戻されP 1が構築されている。堆積土4層中から被熱した礫が出土している。P 7は南西の古段階主柱穴で、規模は長軸約70cm、短軸約60cm、深さ約87cmを測る。柱は抜き取られ埋め戻されている。2層は柱痕跡で底面は円形に変色化し、周囲に酸化鉄が集積する。

P 6、P 8～P12は柱痕跡を持つ。いずれの柱穴も柱は抜き取られた後、埋め戻されており、底面では柱痕跡が深さ5cm程の凹みとして確認された。P11の1層は柱痕跡で、底面に径10cm、深さ10cm程の凹みが確認された。P 6・P 9・P12の柱痕跡では底部の浅い凹みに、褐灰色の変色が認められる。各柱穴の規模は一辺が30cm前後で、深さは40～50cm前後である。これらの柱穴はその規模と位置から、床面の間仕切り等の施設に伴うものであった可能性がある。

P15からP20は壁柱穴と考えられ、主柱穴の延長線上の壁面に位置している。住居西壁では、約120～190cm間隔で4穴が検出された。これらの柱穴の規模は20～30cm前後、検出した深さ約10～50cmで、



第18図 V層上面構造配置図



第19図 SI 1 壁穴住居跡平面図

掘り方はほぼ垂直に立ち上がる。

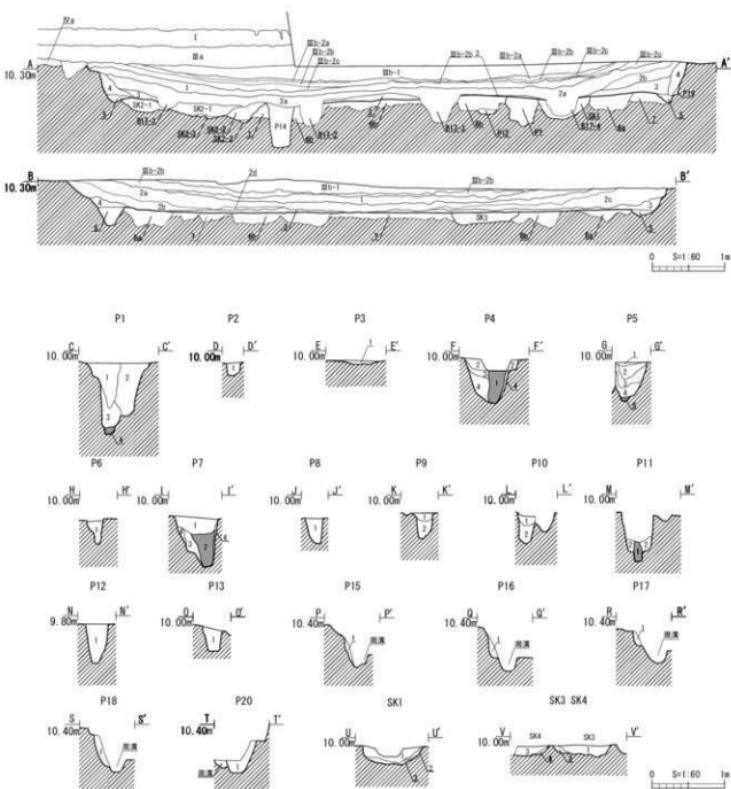
【周溝】壁際をほぼ全周する。溝幅15~25cm、深さ10~25cmを測る。北側では幅が狭くなり、規模が小さくなる。

【カマド】調査範囲からは確認されなかったが、調査区東壁・北壁断面において焼土・炭化物を多量に確認していることから、住居北壁中央に位置していたと考えられる。

【その他の施設】土坑状遺構としてSK 1~SK 6を確認した。SK 1は住居南西に位置する。小溝状遺構B17-4に削平され、堆積土の一部は消失している。SK 2は推定されるカマドの西側に位置し、調査区北壁外に延びる。

1層は焼土・炭化物を多く含み、やや乱れた層状に堆積する。SK 3は住居中央からやや東寄りに位置する。土坑底面からP 8が確認された。形状は不整形で、堆積土の状況から施設の建替えに伴って掘り返した床面構築土

第2節 V層上面検出遺構



第20図 SI 1 穫穴住居跡断面図

SI 1 住居跡 床面施設観察表

遺構名	平面形	幅員 (cm)	深さ (cm)	備考
SI 1	不規則形	41 × 30	24	
SK1	不規則形	(280) × (60)	15	調査(4壁壁外に見びら。
SK2	不規形	110 × 90	14	
SK4	不規形	280 × 190	21	調査(4壁壁外に見びら。
SK5	不規形	(70) × (60)	15	
SK6	偏丸方形	50 × (30)	15	偏り方々壁壁外。
P1	不規円	180 × (84)	100	半丸円。和田跡2箇所。
P2	不規円	100 × 80	15	
P3	不規円	70 × 60	17	
P4	不規円	60 × 55	62	半丸円。和田跡1箇所。
P5	不規円	64 × (43)	83	和田跡3箇所。
P6	不規円	30 × 20	50	和田跡1箇所。
P7	不規円	70 × 60	87	和田跡1箇所。
遺構名	平面形	幅員 (cm)	深さ (cm)	備考
P8	不規円	25 × 25	30	M.3.2.で確認。和田跡1箇所。
P9	不規円	25 × 25	42	調査方々壁壁外に見びら。
P10	不規円	35 × 35	47	調査方々壁壁外に見びら。
P11	偏丸方形	50 × 40	78	調査方々壁壁外。和田跡1箇所。
P12	偏丸方形	35 × 30	53	調査方々壁壁外。
P13	不規円	30 × 25	23	調査方々壁壁外。
P14	不規円	(40) × (15)	49	調査方々壁壁外。和田跡1箇所。
P15	不規円	25 × 25	49	和田跡1箇所。
P16	不規円	25 × 20	60	和田跡1箇所。
P17	不規円	20 × (15)	20	和田跡1箇所。
P18	不規形	30 × 20	46	和田跡1箇所。
P19	不規円	25 × 10	38	和田跡1箇所。
P20	不規円	40 × 25	37	和田跡1箇所。

第2表 SI 1 穫穴住居跡床面施設観察表

SI 1 積穴住居跡 A 断面・B 断面土層注記表

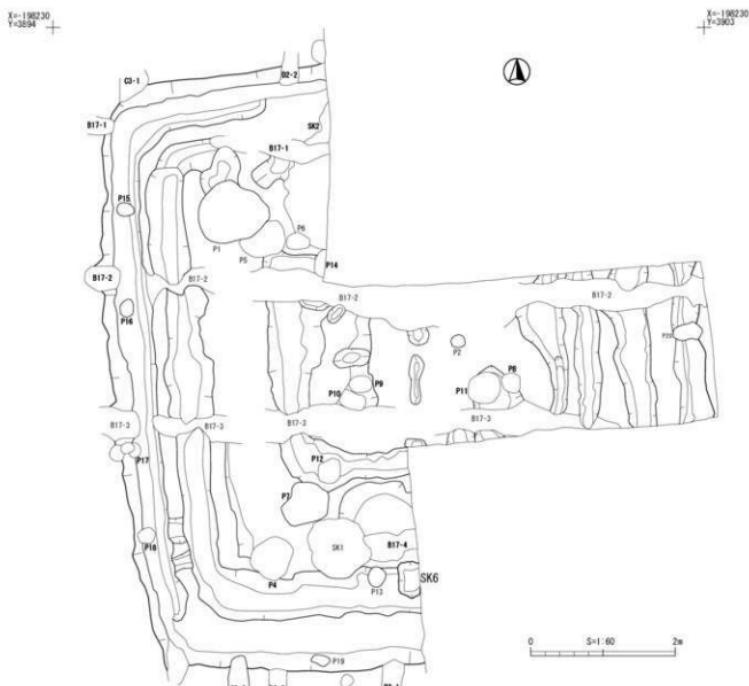
部位	層位	土色	土性	備考
基本層	Ⅲ b-1	2.5Y4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土をやかく、2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少暈合む。炭化物混在。マンガン鉱斑。
	Ⅲ b-2a	2.5Y4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土をやかく、2.5Y3/2 黑褐色粘土を多分に含む。
	Ⅲ b-2b	2.5Y5/2	褐灰褐色	シルト 2.5Y6/2 黄褐色シルトを褐灰褐色。
	Ⅲ b-2c	2.5Y4/1	褐灰褐色	シルト質粘土 2.5Y3/2 黄褐色シルト + 10WY1/1 黄褐色シルト質粘土をやかく含む。
住居堆積土	1	2.5Y4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 10WY1/1 黄褐色粘土質シルト + 2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを含む。
	2a	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 10WY1/1 黄褐色粘土質シルトをやかく、2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少暈合む。
	2b	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 10WY3/3 黄褐色シルトをやかく、2.5Y4/2 黄褐色粘土質シルト + ブラックを少暈合む。
	2c	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色シルト質粘土を少暈合む。
	2d	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 10WY3/3 黄褐色シルトをやかく、2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少暈合む。
	3	2.5Y4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色粘土質シルト + ブラックを少暈合む。
	4	2.5Y3/2	褐褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色粘土質シルトを含む。
	5	2.5Y3/2	黑褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色粘土質シルトをやかく。
廻り方	6a	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色粘土質シルト + ブラックをやかく。
	6b	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色粘土質シルト + ブラックをやかく、炭化物を、黒土を多分に含む。
	7	2.5Y3/4	褐褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色粘土質シルトを軽度にもしくてブロッケをやかく。
SK2	1	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色粘土質シルトを少少、黒土・炭化物を含む。
	2	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色粘土質シルトを多量、黒土・炭化物を含む。
	3	2.5Y3/4	褐褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色粘土質シルトを少量、黒土・炭化物を少暈合む。

SI 1 積穴住居跡 施設土層注記表

断面	部位	層位	土色	土性	備考
C	P1	1	2.5Y3/2	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を少少、炭化物を多量、黒土を微量含む。
		2	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 炭化物をやかく、粘土を微量含む。
		3	2.5Y3/2	黑褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
		4	2.5Y3/2	黑褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
D	P2	1	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 炭化物を含む、黒土・2.5Y4/2 黄褐色シルト質粘土少少含む。
E	P3	1	2.5Y4/2	オーリー褐色	粘土質シルト 炭化物を含む、黒土 + 粘土を微量含む。
F	P4	1	2.5Y3/2	黑褐色	粘土質シルト 炭化物 + 黑土を微量含む。
		2	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y4/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
		3	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y4/2 黄褐色シルト質粘土を少少、黒土を微量含む。
		4	2.5Y4/3	黑褐色	粘土質シルト 黒土を微量含む。
G	P5	1	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y4/2 黄褐色シルト質粘土をやかく、炭化物、黒土を微量含む。
		2	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
		3	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y4/2 黄褐色シルト質粘土を少少、黒土を微量含む。
		4	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む、炭化物を多量含み、被焼した繩文住土している。
		5	2.5Y3/2	黑褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む、炭化物を微量含む。
H	P6	1	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黃褐色シルト質粘土 + 黑土 + 炭化物を微量含む。
I	P7	1	2.5Y3/2	褐オーリー褐色	粘土質シルト 炭化物 + マンガニ鉱斑を含む。
		2	2.5Y3/2	黑褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土をやかく含む。
		3	2.5Y4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
		4	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を微量含む。
J	P8	1	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土をやかく多く、炭化物、黒土を微量含む。
K	P9	1	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y4/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む、2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を微量含む。
L	P10	1	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土をやかく多く、2.5Y4/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
M	P11	1	2.5Y3/2	黑褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
N	P12	1	2.5Y3/2	褐オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y4/2 黄褐色シルト質粘土をやかく、炭化物を多量含む。
O	P13	1	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む、黒土を微量含む。
A	P14	1	2.5Y4/2	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む、2.5Y4/3 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
P	P15	1	2.5Y3/2	褐灰褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色シルト質粘土 + ブラックをやかく、黒土を微量含む。
Q	P16	1	2.5Y4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色シルト質粘土 + ブラックをやかく。
R	P17	1	2.5Y4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を少少含む。
S	P18	1	2.5Y4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色シルト質粘土 + ブラックをやかく。
A	P19	1	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む、2.5Y3/3 黄褐色シルト質粘土を微量含む。
T	P20	1	10WY4/2	褐灰褐色	粘土質シルト 10WY1/1 黑褐色粘土 + ブラック + 黒土 + ブラック、炭化物をやかく含む。
U	SK1	1	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 10WY1/1 黑褐色粘土 + ブラック + 黒土 + ブラック、炭化物をやかく含む。
	2	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 10WY1/1 黑褐色粘土 + ブラック + 黒土 + ブラック、炭化物を少暈合む。	
	3	2.5Y3/2	黑褐色	粘土質シルト 10WY1/1 黑褐色粘土 + ブラック + 黒土 + ブラック、炭化物を多量含む、SK4 塵土。	
	4	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土を少少含む、10WY1/1 黑褐色粘土 + ブラック + 黒土 + ブラック、炭化物を少暈合む。	
V	SK3・SK4	1	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 10WY1/1 黑褐色粘土 + ブラック + 黒土 + ブラック、炭化物を少暈合む。
	2	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土 + ブラック + 黒土 + ブラック、炭化物を少少含む、SK3 塵土。	
	3	2.5Y3/3	褐オーリー褐色	粘土質シルト 10WY1/1 黑褐色粘土 + ブラック + 黒土 + ブラック、炭化物を多量含む、SK4 塵土。	
	4	2.5Y4/3	オーリー褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黄褐色シルト質粘土 + ブラック + 黑土 + ブラック、炭化物を少暈合む。	

第3表 SI 1 積穴住居跡土層注記表

第2節 V層上面検出遺構

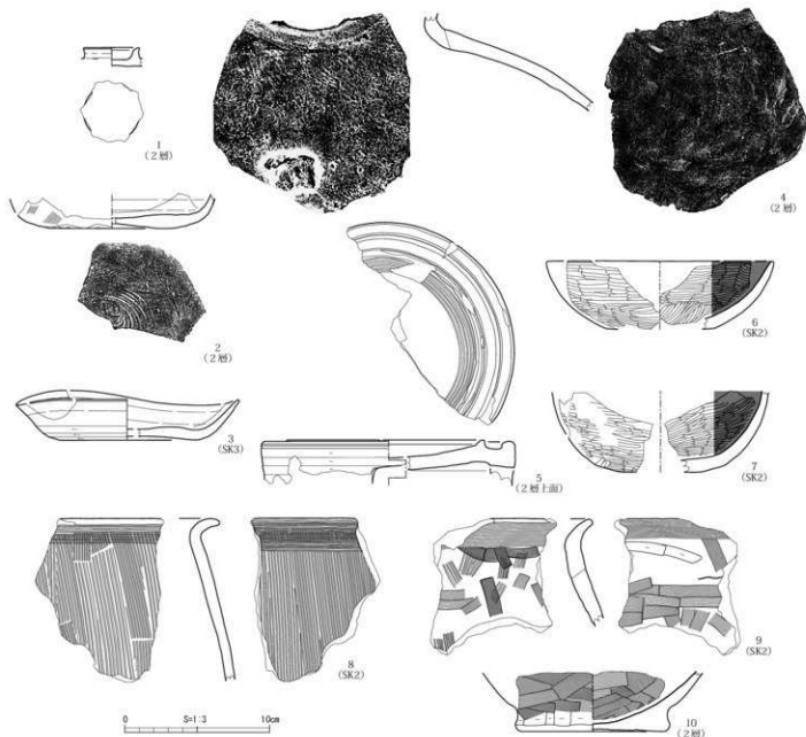


第21図 SI 1 積穴住居跡掘り方平面図

を埋めたことが推測される。SK 4は住居中央よりやや北側に位置する。調査区北壁外に延びるやや大型の掘りこみを確認した。焼土・炭化物をやや多く含み、形状は不整形で東西に長い。SK 5はSK 3の南西直近で確認した。焼土・炭化物を多く含む。小溝状遺構B17-3に大きく削平され、残存状況は悪い。SK 6は住居南側の掘り方底面に位置し、調査区東壁外に延びる。わずかに被熱を受けた焼土ブロックを多量に含む。

【掘り方】中央は平坦だが、住居壁に沿って溝状の掘り方を2重に持つ。

【出土遺物】Ⅲ b2層中から1層上面で出土したものと、2層中および床面付近で出土したものとに大きく二分される。遺物は出土数が多い順に土師器壺破片、土師器環破片、須恵器壺破片、須恵器環破片などが出土している。他、須恵器円面鏡の破片、須恵器蓋、石製品、金属製品、被熱を受けた自然礫等が出土している。このうち須恵器蓋1点・壺2点・甕1点・円面鏡1点の5点、土師器環2点・甕3点の5点を第22図に、金属製品2



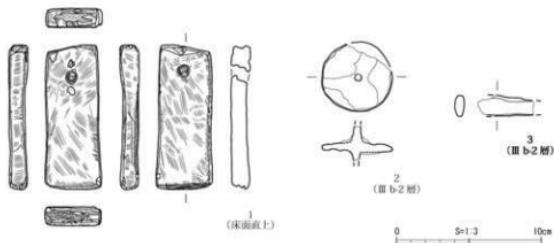
回数 番号	登録 番号	出土位置	種類	器種	部位	法量(cm)			外側調整	内側調整	備考	写真図版	
						口径	底径	高さ					
22-1	E-010	N16699 E95~99	SI1 2層	漆器	蓋	つまみ	—	—	ロクロ調整	ロクロ調整	内面：自然樹付有、洞空 ツルル	11-9	
22-2	E-009	N180~183 E95~99	SI1	漆器	杯	杯下平~底	—	(8.7) (2.4)	ロクロ調整、底空：因縫孔 ツリ穴	ロクロ調整	—	11-10	
22-3	E-008	N166910 E92~97	SI1 SK3	漆器	杯	口縁一底	15.4	9.4	2.2~ 3.5 ロクロ調整、底空：ハラケズリ	ロクロ調整	内面自然樹付有、渋み あり	11-11	
22-4	E-011	N163E97	SI1	漆器	蓋	体上平	—	—	(6.7) 平行タタキ目	ヘラナメ	漆面江漬	外面漆減、自然樹付有	11-12
22-5	E-012	N180~183 E92~95	SI1 2層	漆器	円筒罐	上面部	17.4	—	(3.1) 平行：ハラケズリ。底 方半丸、チヂ	ロクロ調整	平行通かし三窓	11-13	
22-6	C-004	N16898 E95~98	SI1 SK2	土師器	杯	口縁一底下	(15.6)	—	(3.7) 内側毛手	ヘラミガキ	内面裏毛削除	11-14	
22-7	C-006	N16898 E95~98	SI1 SK2	土師器	杯	体~底	—	(9.0) (5.6)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内面黑色處理	11-15	
22-8	C-007	N16898 E95~98	SI1 SK2	土師器	蓋	口縁一底上 半	—	—	(11.2) 平行：ハケメーテ縁：ヨコ ナメ	ヘラミガキ	工具之種	11-16	
22-9	C-008	N16898 E95~98	SI1 SK2	土師器	蓋	口縁一底上 半	—	—	(9.4) 平行：ヨコナメーテナメ。口 縁一底：ヨコナメ	ヘラミガキ、ヘラケズリ、 平行通かし	外面漆熱、内面漆削除	11-17	
22-10	C-009	N167E101	SI1 2層	土師器	蓋	体下平~底	—	(10.0) (4.1)	頭内質：ハラケズリ体：	ヘラナメ	底面に木漆附	11-18	

第22図 SI 1 穫穴住居跡 出土遺物（1）

第2節 V層上面検出遺構

点、石製品1点を第23図に図示した。

第22図1は須恵器蓋の凹状摘み部分である。摘みの周囲は意識的に打ち欠いたものと考えられる。2は須恵器環の底部のみで全体の器形ははっきりしない。平底で回転式切り後、外周に手持ちヘラケズリ整形が施される。3の須恵器環は平底で外傾し直線的に立ち上がる器形である。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ整形が施される。4は須恵器環の頸部下端から肩部にかけての破片である。外面には平行タタキ目が、内面にはてき痕をナデ消している。5は円面鏡である。脚部下半を欠損しているが、中程に方形の透かしが設けられる。観側及び海は緩やかに窪み、堤は台形状である。外側面に回転ヘラケズリ調整が施される。6および7は土師器環である。6は平底、7は丸底と考えられ、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾して立ち上がり、外面の口縁と体部の境に稜を持たない器形である。調整は双方とも内面・外面ともヘラミガキが施され、内面はヘラミガキが施された後、黒色処理される。8・9は土師器環口縁部から肩部の破片で、いずれも外面の口縁と肩部の境には段を持たず。口縁部は8がやや弱く、9がやや強く外反する。とともに、肩部の最大径は中位に持つものと考えられる。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、肩部が、8は内外面とも縱方向にハケメ調整が施される。9は外面にハケメの後ヘラナデ、内面はヘラケズリの後ヘラナデ調整が施される。10は台状の底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる甕の底部である。外面は体部下端にヘラケズリ、体部及び内面はヘラナデ調整が施される。



回収番号	登録番号	出土位置			種別	器種	法量 (cm)			剥離角 (度)	重量 (g)	石材	母岩	自然面	備考	写真出版
		グリッド	遺構	層位			全長	幅	厚さ							
23-1	Kd-a-001	N108 E96	S21	床面 出土	石製品	砥石	10.0	3.9	1.3	-	86.04	粘板岩	-	無	孔1つ有(両面穿孔)、風面4面。	11-19
23-2	N-003	N109 E95	S21	壁上 2層	金屬製品	結牌車	(2.8)	1.47	-	26.27						11-20
23-3	N-004	N104 ~ 107 E100 ~ 103	S21	壁上 2層	金屬製品	刀子	(3.9)	1.48	0.6	5.33	約0.1g					11-21

第23図 SI 1 穫穴住居跡 出土遺物（2）

第23図1は砥石である。砥面は4面である。表面上に両面（表→裏）から穿孔され、表面には穿孔初期段階のものと考えられる窪みがある。上下両端部には溝状の風化面を留めており、粗い条痕は砥石成形時のものと思われる。石材は粘板岩である。

2は鉄製の紡錘車と思われる。3は刀子の柄の一部と考えられる破片である。両端を欠損する。

(2) SI 2 穫穴住居跡 (第 24・25 図、図版 4・5・11)

【位置・確認】N145 ~ 146 ~ E88 ~ E92 グリッドで竪穴住居跡全体の 1/2 程を検出した。この周辺は V 層確認面の中で最も標高値の高い範囲に相当する。

【新旧関係】小溝状遺構 A14 群、B 5・7 群と重複し、最も古い。調査最終時に SI 2 を含めた調査区南壁断面の再確認を行い、拡張が行われたことを確認した。当初掘り方と認識していた上位床面下の堆積土 11 層は古い床面を埋めたものであり、新段階の床面構築時には住居西壁を共有しつつ北壁・東壁を若干拡張したものと考えられる。以下、新段階住居、古段階住居に分けて各床面で検出された遺構について記載する。

新段階住居

【規模・形態】東西軸約 4.2 m、南北軸は約 1.6m 以上で、遺構の南半部は調査区外へ延びる。

【主軸方位】煙道基準で E - 8° - N である。

【堆積土・構築土】大別 11 層を確認した。1 層は、黒褐色粘土質シルトで、堆積状況から小溝状遺構 A12 群および A14 群に伴う耕作土の可能性がある。2 層は、住居西壁沿いに堆積する。3 層から 5 層は煙道堆積土である。3 層及び 4 層は、堆積状況からそれぞれ細別される。5 層は、煙道底面直上の堆積土である。6 層は、煙道天井がブロック状に残存する範囲である。7 層は、煙道奥壁の被熱範囲である。8 層は、黄灰色粘土層で、床直上に薄く堆積する。9 層及び 10 層は周溝内堆積土で、9 層は東壁から北壁にかけて、10 層は西壁沿いに堆積する。11 層は、新段階床面構築土である。層上位は、黄褐色土の割合が高い。

【壁面】やや外傾して立ち上がる。北壁は、小溝状遺構 B5 群に大きく削平される。

【周溝】残存範囲において、ほぼ周全する。西壁沿いの周溝は、やや深い。

【カマド】カマド本体は残存しないが、煙道位置から東側に構築されていたものと考えられる。調査区南壁において、煙道入り口から奥壁までを確認した。煙道天井が一部残存する。

【その他の施設】柱穴は確認されず、土坑状遺構 SK 1 を確認した。カマド火床直前面に位置していたと考えられ、焼土・炭化物を多量に含む。

【掘り方】掘り方は持たず、旧段階床面上から 10 ~ 15cm 前後床面を上げて構築している。

【出土遺物】新段階の床面直上で比較的残存状況の良好な土師器壺が出土した。うち 2 点を第 25 図に図示した。1 は平底で、体部から口縁まで直線的に立ち上がり、口縁部と体部との間に段や稜を持たない。調整は外面口縁にヨコナデ、体部に一部ヘラミガキが観察される。また、体部下半から底部にはヘラケズリが施され、底部に「×」の刻書が見られる。内面は全面に磨きが施された後黒色処理が施される。2 は丸底で口縁部まで綏やかに内湾して立ち上がる器形である。表面が摩耗しておりはっきりしないが、外面底部にヘラケズリ、内面口縁部付近に横方向のヘラミガキが観察される。

古段階住居

【規模・形態】東西軸約 4.4 m、南北軸は約 1.4m 以上で、遺構の南半部は調査区外へ延びる。

【主軸方位】煙道基準で N - 5° - W である。

【堆積土・構築土】12 ~ 16 層の 5 層を確認した。12 ~ 14 層は、掘り方である。上面は、古段階住居床面である。12 層は溝状の掘り方で、13 層は焼土・炭化物を含む土坑状の落ち込み範囲である。14 層は VI 層を主体とし、混入土をほとんど含まない。15・16 層は煙道堆積土である。15 層は煙道崩落土と思われる。16 層は煙道底面直上の堆積土で、炭化物を含む。

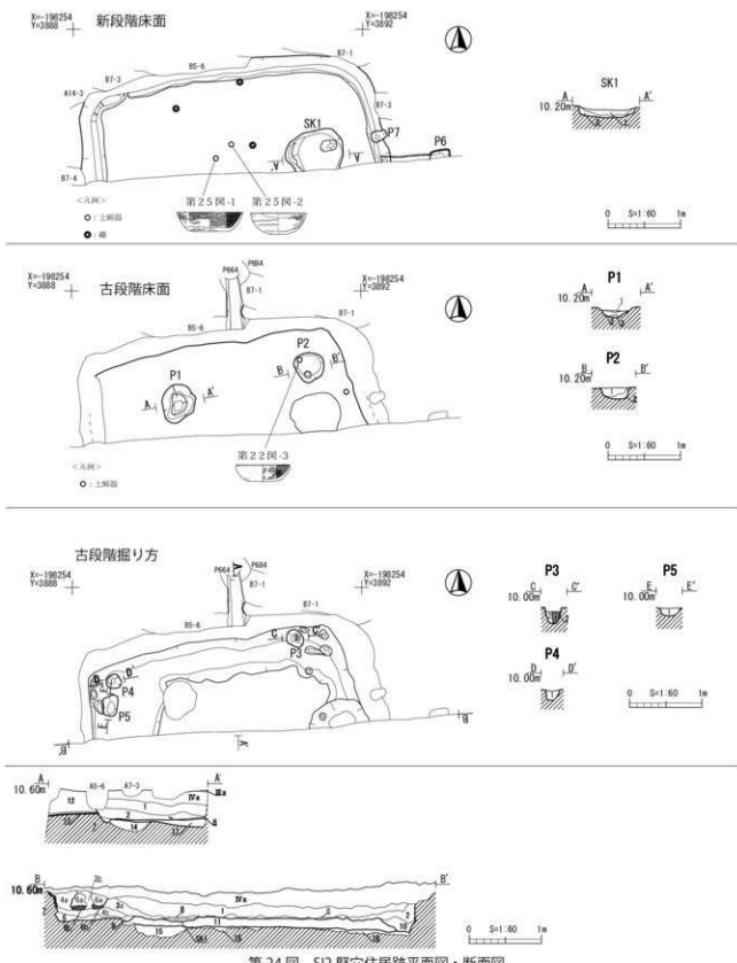
【壁面】東壁と北壁は、新段階住居の拡張により消失している。西壁は共有しているものと思われる。

【柱穴】P 1 ~ P 5 を確認した。P 1 及び P 2 は、床面で確認した。P 2 は焼土・炭化物を多く含む。いずれも浅く、主柱穴かは判然としない。P 3 ~ P 5 は掘り方で検出した。P 3 は小形だが、柱痕跡を持つ。

【カマド】カマド本体は残存していない。煙道の一部を、北壁を削平する小溝状遺構 A5 ~ 6 の壁面で確認した。煙出しは P684 及び P664 に削平され残存しない。

第2節 V層上面検出遺構

【掘り方】住居東側及び北側は、幅30~50cmの溝状の掘り方を持つ。西壁沿いでは、ごく浅い掘り方が確認された。床面中央は掘り方を持たず、VI層を床面としている。



SI 2 住居跡 土層注記表

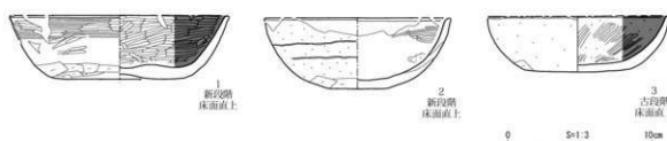
対応面	部位	層位	土色	土性	備考
新段側住居	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2 黒褐色粘土質シルト・2.5Y3/3 黃褐色粘土質シルトを少混。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2 黒褐色粘土質シルト・2.5Y3/3 黃褐色粘土質シルトを少混。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
	3a	10YR4/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
標準側住居	3b	10YR4/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
	4a	10YR4/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
	4b	10YR4/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
	5	2.5YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
壁面天井	6a	2.5Y5/3	黒褐色	粘土質シルト	壁面天井 黒褐色。
	6b	10YR3/2	黒色	粘土質シルト	壁面天井 黑色。
壁面隔壁	7	2.5Y5/3	黒褐色	粘土質シルト	壁面化粧物が付着している。
	8	2.5Y4/1	黒褐色	粘土	2.5YR4/2 黑褐色粘土を含む。
床直上堆積物	9	10YR4/1	暗褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。 粘土・腐化物粒をや多く含む。 腐化鉛鉱斑状。
	10	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトを含む。 粘土・腐化物粒を少混合。
床面側壁	11	2.5Y4/3	オリーブ色	粘土質シルト	2.5Y3/1 黑褐色粘土質シルトブロックを多量。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
	12	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/4 オリーブ色ブロックを多く含む。 粘土粒・腐化物粒をや多く含む。
	13	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/4 黑褐色粘土質シルトブロックをや多く含む。 粘土粒・腐化物粒を少混合。
	14	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。 粘土・腐化物粒を少混合。
古段側住居	15	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR3/3 黄褐色粘土質シルトブロックを多量。 粘土・腐化物粒をや多く含む。
	16	2.5Y3/3	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y3/1 黑褐色粘土質シルトを少混合。
新的側住居側面		SK1			他の土壁に共通。

SI 2 積穴住居跡 施設土層注記表

部位	層位	土色	土性	備考
SK1	1	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 腐化物・粘土ブロックを多量含む。
	2	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR5/4(?) 黑褐色粘土質シルトブロックをや多く含む。 腐化物・粘土を多く含む。
P1	1	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 粘土・黒土質シルトを多量含む。
	2	10YR1/2	暗褐色	粘土質シルト 2.5Y3/4 黄褐色シルト粘土質シルトブロックをや多く含む。 粘土粒・腐化物含む。
	3	10YR1/2	暗褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黑褐色シルト質粘土を多量含む。
P2	1	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 粘土・黒土を多量含む。
	2	10YR1/2	暗褐色	粘土質シルト 粘土・黒土を多量含む。
P3	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 粘土・黒土を多量含む。
	2	2.5Y3/3	明オリーブ色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黑褐色シルト質粘土をや多く含む。 腐化物・粘土を多量含む。
P4	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR5/4(?) 黑褐色粘土質シルトをや多く含む。 腐化物・粘土を多量含む。
P5	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 2.5Y3/2 黑褐色シルト質粘土を少量。 粘土粒を多量含む。

第4表 SI 2 積穴住居跡土層注記表

【出土遺物】住居北東側の床面直上からほぼ完形の土師器杯が出土し、第25図3に図示している。平底の杯で、体部から口縁に向かって緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部と体部の間に段や棱を持たない。調整は外面部にヘラケズリ、内面は全面にヘラミガキが施された後、黒色処理が施される。



回数	登録番号	出土位置	層別	器種	部位	法線(cm)		外表面調整	内面調整	備考	写真図版	
						口径	底径					
25-1	C-009	N145090	S22	新内階 床面上	土師器	坪	口径一底 8.0 ~ 9.0	4.4	口縁:コニャード一部分に ヘラミガキ。内面:全体に ヘラケズリ。内面にヘラミガキ。 底:ヘラケズリ	ヘラミガキ 内面全体處理。部分的に ヘラケズリ。	11-22	
25-2	C-010	N145091	S22	新内階 床面上	土師器	坪	口径一底 12.0	5.0	4.9	底:ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ	11-23	
25-3	C-011	N146092	S22	古内階 床面上	土師器	坪	口径一底 12.5	7.4	3.9	底下部:ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ	11-24	

第25図 SI 2 積穴住居跡出土遺物

2. 堀立柱建物跡

V層上面では900基近くのピット・小柱穴を確認した。これらのピット・小柱穴の規模はおよそ20~30cmで、平面形は円形ないしは不整円形を呈し、深さは30cm以上を測るものが多い。

一方、これら的小形のピット・小柱穴とは特徴が異なる柱穴跡が、調査区北西、調査区中央西側・調査区南側で確認された。調査区北西の一群は規模50~60cmで、平面形は圓丸方形を呈し、深さは40~60cmを測るものが多い。調査区中央西側の一群は、平面形は圓丸方形だが小形で角がやや張っている。規模は30~50cm、深さは80cm以上を測るものがある。また一部の柱穴は上部を抜き取りのため大きく掘下げられ、下位から圓丸方形の柱穴プランが確認されている。調査区南側では規模が50~70cm、深さ50~60cm前後を測るやや大形の柱穴が検出された。これらの柱穴の平面形は長楕円ないし不整円で一定しない。

検出した柱穴は各範囲のまとまりごとに並びを検討し、7棟の掘立柱建物跡を確認した。SB1は調査区南側において、SB2~SB5は調査区北側においてそれぞれ同規模の柱穴の並びを想定したものである。またSB6、SB7は同規模の柱穴により構成される柱列の確認と、柱列との関連が予想される土坑として、北側に位置するSK6・9、西側に位置するSK7を確認した。以下、各建物跡について個別に記載するが、建物跡を構成する各柱穴の規模は遺構計測表に示す。

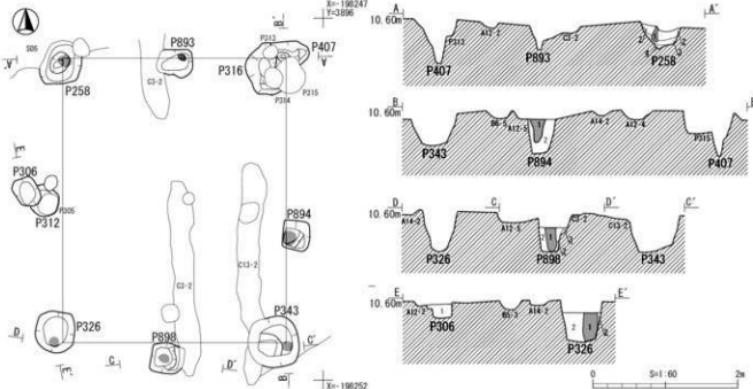
(1) SB1 掘立柱建物跡(第26図、図版5)

【位置・確認】N148~152・E92~95グリッドに位置する。

【新旧関係】小溝状遺構B6群、C3・13群、SD5と重複関係にあり、B6群より新しく他の遺構より古い。

【規模・形態】東西2間×南北2間の建物跡で、南北方向に棟を持つ。P258・893・316・407・894・343・898・326・306・312の10基の柱穴によって構成され、東西約350cm南北約380cmを測る。柱間は約360~380cmを測る。北東隅の柱穴は2基が重複関係にあり、新しい順にP316・407である。西辺の柱穴は2基が重複関係にあり、新しい順にP306・312である。柱痕跡が確認された柱穴は6基である。そのうちP893と326は底面で柱痕跡を確認した。P893は底面に柱痕跡の凹みが残る。またP326は底面の隅で灰褐色に変色した柱痕跡を確認している。4隅の柱穴と同様の形状と規模を有する柱穴が周辺に確認されておらず、建物跡の展開上もやや不明な部分が多い。また中間の柱穴は柱筋に乗らず外側に位置するものが多い。

【主軸方位】N=0°~Wである。



第26図 SB1 掘立柱建物跡平面図・断面図

SB 1 挖立柱建物跡 計測表・土層注記表

遺構	幅締 (cm)	層位	土色	土性	備考	
					長軸 短軸 深さ	
P238	59 (52)	48	1	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト
			2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト
			3	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト
			4	10YR4/3	にじ・黒褐色	粘土質シルト
P803	(49)	34	35	1	10YR2/3	黒褐色
P316	71	42	53	1	10YR2/3	黒褐色
P407	446	228	63	1	10YR2/3	黒褐色
P894	40	38	59	1	10YR4/2	灰褐色
			2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト
P343	72	70	59	1	10YR2/3	黒褐色
			2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト
P898	448	42	54	1	10YR2/3	黒褐色
			2	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト
			3	10YR4/3	にじ・黒褐色	粘土質シルト
P336	37	54	37	1	10YR2/3	黒褐色
			2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト
P306	41	32	22	1	10YR2/3	黒褐色
			2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト
P312	(45)	42	54	1	10YR2/3	黒褐色
			2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト
			3	10YR4/3	にじ・黒褐色	粘土質シルト

第5表 SB 1 挖立柱建物跡計測表・土層注記表

(2) SB 2 挖立柱建物跡(第27・28図、図版5)

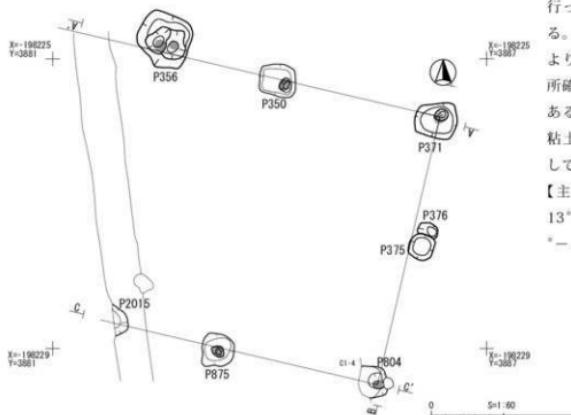
【位置・確認】 N170 ~ 175・E81 ~ 86グリッドに位置する。

【新旧関係】 小溝状遺構 A 8・9群、C 1群と重複関係にあり、A 8・9群より新しく、C 1群より古い。

【規模・形態】 東西2間以上×南北2間の建物跡で東西方向に棟を持つと考えられる。P356・350・371・375・376・804・875・2015の8基の柱穴によって構成され、長軸は検出長で約420cm、短軸は360cmを測り、調査区西壁外へ伸びる。柱間は約160~220cmである。東辺の柱穴は2基が重複関係にあり、新しい順にP375・376である。柱痕跡を確認した柱穴は5基である。P804は底面で深さ5cm程の柱痕跡の凹みを確認している。その他の柱穴では断面で柱状の柱痕跡を確認している。また、断面観察から、P356では柱の

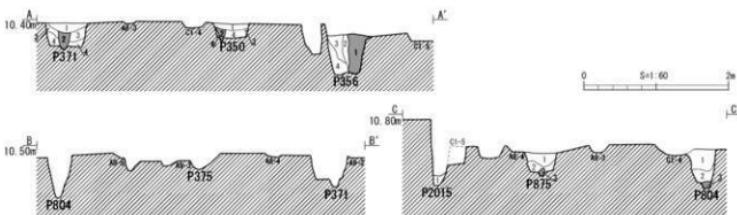
抜き取り並びに据え直しを行ったと見られる痕跡がある。柱穴の底面では土圧により変色した柱痕跡を2箇所確認した。1層は柱痕跡であるが、褐灰色に変色した粘土の外周に酸化鉄が集積している。

【主軸方位】 南北軸でN-13°-W、東西軸でE-25°-Sである。



第27図 SB 2 挖立柱建物跡平面図

第2節 V層上面検出遺構



SB 2 挖立柱建物跡 土層注記表・計測表

遺構	幅緯 (cm)	層位	土色	土性	備考		
SB 2 長軸 短軸	幅緯 (cm)	深さ					
P356	72	64	69	1 2 3 4	2.5V3/2 黒褐色 2.5V4/2 灰褐色 2.5V4/2 粘土質シルト 2.5V3/2 黑褐色	シルト質粘土 粘土質シルト 粘土質シルト シルト質粘土	粘板岩。外側に粘化鉄が集中し、内側は灰褐色に変色する。 2.5V3/4 黒褐色粘土を含む。 2.5V3/4 黒褐色粘土を多量含む。
P350	50	45	27	1 2 3 4	10V8A/2 灰褐色 10V8A/2 黑褐色 10V8A/2 黑褐色 10V8A/2 黑褐色	粘土質シルト シルト質粘土 粘土質シルト 粘土質シルト	2.5V3/4 黒褐色粘土+ブロックを含む。頂部八脚力。 10V8A/4 に少し灰褐色粘土を含む。 2.5V3/4 黑褐色粘土を少量化。
P371	59	47	42	1 2 3 4	10V8A/2 灰褐色 10V8A/2 黑褐色 10V8A/2 黑褐色 10V8A/2 黑褐色	粘土質シルト シルト質粘土 粘土質シルト 粘土質シルト	10V8A/4 に少し灰褐色粘土+シルトブロックを少量化。 粘板岩。2.5V3/4 黑褐色粘土を少量化。
P375	30	35	23	1	10V8A/2 黑褐色	粘土質シルト	2.5V3/1 黑褐色粘土シルトブロックを含む。
P376	220	18	44	1 2	10V8A/2 黑褐色 10V8A/2 黑褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	10V8A/4 に少し灰褐色粘土+粘土質粘土+ブロックを含む。
P804	40	33	60	1 2 3	10V8A/2 灰褐色 2.5V4/3 キリーブル 2.5V4/2 黑褐色	粘土質シルト シルト質粘土 シルト質粘土	10V8A/4 に少し灰褐色粘土+シルト質粘土+ブロックを含む。抜き取り。 10V8A/2 灰褐色シルト質粘土ブロックを少量化。抜き取り。
P875	51	49	43	1 2 3	10V8A/2 灰褐色 10V8A/2 灰褐色 10V8A/2 灰褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	2.5V3/4 黑褐色粘土+シルトを含む。
P2015	43	628	53	1	10V8A/2 灰褐色	粘土質シルト	2.5V3/4 黑褐色粘土+シルトブロックを多量含む。
						10V8A/2 黑褐色粘土+シルトブロックを多量含む。	

第28図 SB 2 挖立柱建物跡断面図

(3) SB 3 挖立柱建物跡（第29図、図版6）

【位置・確認】 N164～167・E91～92に位置する。

【新旧関係】 小溝状遺構 A 8・9群、B 4群と重複関係にあり、小溝状遺構 A 8・9群より新しく、B 4群より古い。

【規模・形態】 東西2間以上×南北2間の建物跡で、東西方向に棟を持つと考えられる。SK23・P388・866・666・787・409・2017の7基の柱穴によって構成されており、長軸は検出長で約340cm、短軸は280cmを測り、調査区西壁外へ伸びる。P2016はP2017と同規模の柱穴であり、柱筋はいずれが構成する柱穴に含めて示した。この場合は東西2間×南北2間の建物跡の可能性が考えられる。柱間は約125～160cmを測る。個々の柱穴は短軸約40～55cm、長軸約35～55cmの隅丸方形を呈しており、深さは35～65cmとやや深い。径10cm前後の柱痕跡が確認された柱穴が4基ある。P787は上層を抜き取り時に削平されている。

【主軸方位】 南北軸でN-0°～W、南北軸でE-2°～Nである。

(5) SB 4 挖立柱建物跡（第30図、図版6）

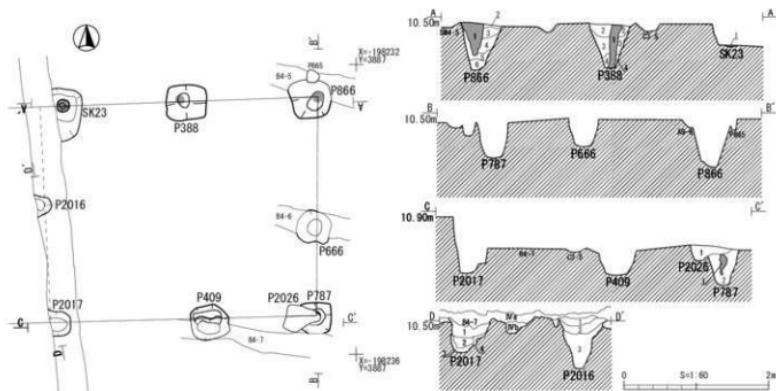
【位置・確認】 N169～173・E88～91に位置する。

【新旧関係】 小溝状遺構 A 8・9群、C 1群と重複関係にあり、A 8・9群より新しく、C 1群より古い。また

SB 5と建物範囲が重複するが、柱穴間の重複関係は無く、小溝状遺構群との重複関係からは、新旧は不明である。

【規模・形態】 東西2間×南北1間の建物跡である。P400・590・53・70・1037・871の6基の柱穴によって構成され、東西245～258cm、南北約240～244cmを測る。柱間は東西で119～125cm、南北で225～240cmを測る。2基の柱穴で柱痕跡を確認した。P74底面では、褐灰色に変色し、浅く凹んだ柱痕跡を確認した。

【主軸方位】 南北軸でN-9°～W、東西軸でE-8～11°～Nである。



SB 3 挖立柱建物跡 土層注記表・計測表

遺構	規模 (cm)	層位	土色	土性	備考
SB 3 長軸	1398	32	1	10YR3/2	黒褐色 シルト質粘土 利根砂、10YR4/3にぶく黒褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P388	57	52	1	2.5Y4/1	黒褐色 シルト質粘土
			2	2.5Y4/1	黒褐色 シルト質粘土
			3	2.5Y4/1	黒褐色 シルト質粘土
			4	5Y4/1	暗オリーブ色 シルト質粘土
			1	10YR3/2	黒褐色 シルト質粘土
P666	54	(53)	2	10YR4/2	黒褐色 粘土質シルト
			3	10YR4/2	黒褐色 粘土質シルト
			4	2.5Y4/3	灰褐色 粘土質シルト
			5	10YR4/2	黒褐色 粘土質シルト
			6	10YR4/2	黒褐色 粘土質シルト
			1	10YR3/2	黒褐色 粘土質シルト
P2026	(46)	(46)	40	1	10YR4/2
P787	—	—	1	10YR4/2	
P409	51	46	1	10YR4/2	黒褐色 粘土質シルト
			2	10YR4/2	黒褐色 粘土質シルト
P2017	27	33	1	2.5Y4/1	灰褐色 粘土質シルト
			2	2.5Y4/1	灰褐色 粘土質シルト
			3	5Y5/3	灰オリーブ色 シルト質粘土
			4	5Y5/3	灰オリーブ色 シルト質粘土
P2016	28	1398	1	2.5Y6/3	灰褐色 粘土質シルト
			2	2.5Y4/2	灰褐色 粘土質シルト
			3	5Y5/3	オリーブ色 シルト質粘土

第29図 SB 3 挖立柱建物跡平面図・断面図

(4) SB 5 挖立柱建物跡 (第30図、図版6)

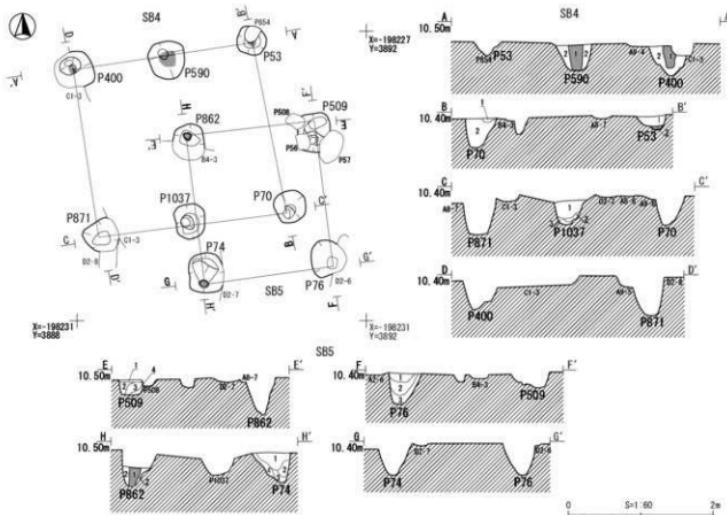
【位置・確認】 N169～171・E89～91に位置する。

【新旧関係】 小溝状遺構 A 8・9群、B 4群、D 2群と重複関係にあり、小溝状遺構 A 8・9群より新しく、B 4群、D 2群より古い。SB 4との新旧関係は不明である。

【規模・形態】 東西1間×南北1間の建物跡である。P862・509・76・74の4基の柱穴によって構成されており、東西約178～190cm、南北約196～202cmを測る。3基の柱穴で柱痕跡を確認した。P53は底面に深さ10cm程の柱痕跡の凹みが残る。

【主軸方位】 南北軸でN-7～9°-W、東西軸でE-6～9°-Nである。

第2節 V層上面検出遺構



SB-4 摳立柱建物跡 柱穴土層記表・計測表

遺構	規模 (cm)	層位	土色	土性	備考
SB 4	長軸 53 短軸 38 深さ 44	1	10YR4/2	黒褐色	シルト質粘土
		2	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
P590	53 50 38	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
		2	10YR4/2	灰褐色	シルト質粘土 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
P53	42 41 15	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
		2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
P70	44 44 40	1	10YR4/2	灰褐色	シルト質粘土 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
		2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 2.5Y5/4 黑褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
P1037	48 39 42	1	10YR4/2	黒褐色	シルト質粘土 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
		2	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
		3	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y5/4 黑褐色粘土質シルトを含む。
P871	46 149 55	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR4/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを含む。

SB-5 摳立柱建物跡 柱穴土層記表・計測表

遺構	規模 (cm)	層位	土色	土性	備考
SB 5	長軸 50 短軸 43 深さ 50	1	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
		2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを含む。
P509	53 45 21	1	10YR3/2	灰褐色	粘土質シルト 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
		2	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 10YR5/4 に近い(黒褐色)粘土質シルトブロックを少量含む。
		3	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 2.5Y5/4 黑褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
		4	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 2.5Y5/4 黑褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
P76	49 49 43	1	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 2.5Y5/4 黑褐色粘土質シルトを含む。
		2	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 2.5Y5/4 黑褐色粘土質シルトを含む。
		3	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 2.5Y5/4 黑褐色粘土質シルトを含む。
P74	53 (48) 44	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
		2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
		3	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
		4	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトブロックを少量含む。

第30図 SB-4・5 摳立柱建物跡平面図・断面図

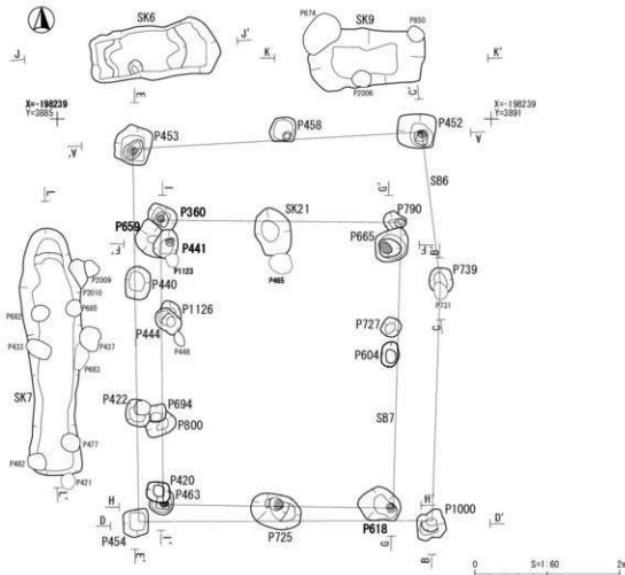
(6) SB 6掘立柱建物跡および周辺土坑 SK6・7・9(第31・32図、図版6・7・8)

調査区中央西側ではSB 6・7の2棟の掘立柱建物跡を確認した。2棟の建物跡は主軸方位をほぼ同方に持ち、SB 6の内側でSB 7を確認しているが、構成する柱穴の重複関係から、SB 6が新しいと考えられる。SB 6の北辺から北側約50～60cmに東西に並列するSK 6・9、西辺から西側約70cmに南北に長軸を持つ溝状のSK 7を確認し、関連する可能性のある施設として報告する。

【位置・確認】 N155°～163°・E85°～91°に位置する。

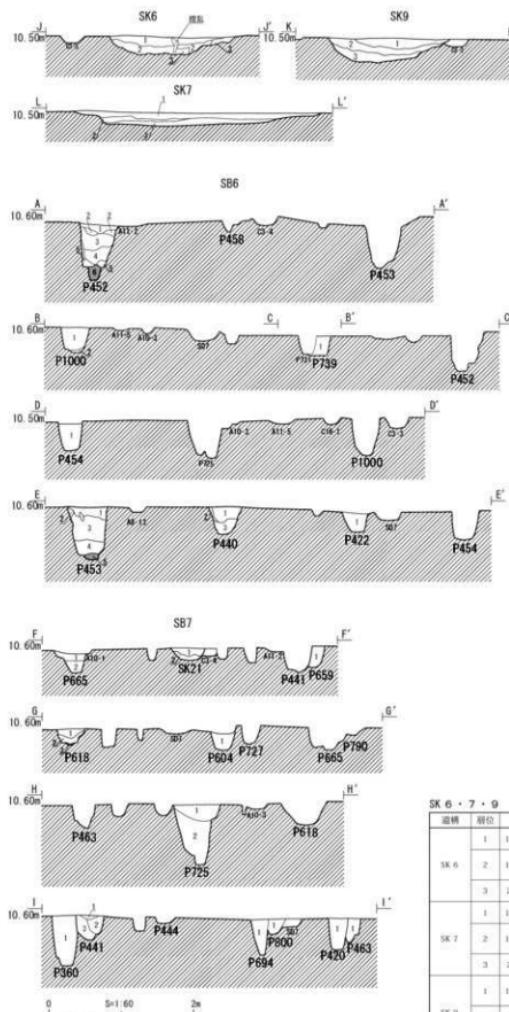
【新旧関係】 小溝状遺構 A 8～10群、B 4群、C 3群と重複し、本遺構が新しい。

【規模・形態】 SB 6は東西2間×南北2間～3間の建物跡であり、南北方向に棟を持つ。P453・458・452・739・1000・454・422・440の8基の柱穴によって構成されており、東西約400～405cm、南北約525～540cmを測る。柱間は東西で152～187cm、南北で187～209cmを測る。P453、P452は底面で5～10cm程の深さの柱痕跡を確認している。SK 6は隅丸長方形を呈し、規模は長軸180cm、短軸75cm、深さ30cmを測る。断面形は幅広のU字型で、壁面は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層で、非クロコ土器飾片が出土している。SK 7は溝状を呈し、規模は長軸270cm、短軸85cm、深さ30cmを測る。断面形は幅広のU字型で、壁面は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層で、非クロコ土器飾片が少量出土している。SK 9は隅丸長方形を呈し、規模は長軸160cm、短軸80cm、深さ40cmを測る。断面形は幅広のU字型で、壁面は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層で、非クロコ土器飾片が少量出土している。



第31図 SB 6 堀立柱建物跡および周辺土坑・SB 7 堀立柱建物跡平面図

第2節 V層上面検出遺構



第32図 SB 6 掘立柱建物跡および周辺土坑・SB 7 掘立柱建物跡断面図

【主軸方位】SB 6 の主軸方位は南北軸で N - 0 ~ 2° - W である。SK 6・7・9 の主軸方位はそれぞれ長軸基準で N - 84° - E・N - 2° - W・N - 89° - E である。

(7) SB 7 掘立柱建物跡(第31・32図、図版6)

【位置・確認】N155 ~ 163・E85 ~ 91に位置する。

【新旧関係】小溝状遺構 A 8 ~ 10群、B 4 群、SB 6 と重複し、小溝状遺構群より新しく、SB 6 より古い。

【規模・形態】東西2間×南北2~3間の建物跡で、南北方向に棟を持つ。9基の柱穴によって構成されているが、西辺の4基の柱穴と北東隅は2~3基の柱穴が重複関係にあり、建て替えがあったものと考えられる。

北西隅の柱穴は3基が重複関係にあり、新しい順にP441・P659・P360である。西辺の柱穴は北から順に、P444・1126(重複関係にあり、新しい順にP444・1126)、P694・800、P420・P463(重複関係にあり、新しい順にP420・463)である。このうち、P694はSB 6 の構成ピットであるP422と重複し、これより古い。北東隅の柱穴は2基が重複関係にあり、新しい順にP665・P790

SK 6・7・9 土層注記表

遺構	層位	土色	土性	組合	
				1	2
SK 6	1	10YR8/2	黒褐色	粘土質シルト	2.3VS/6 黒褐色柱状土質シルト少崩、黒褐色と灰褐色を含む。2.3VS/6 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。2.3VS/6 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。
	2	10YR8/2	灰黒褐色	粘土質シルト	10YR8/6 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。
	3	2.5Y5/4	黒褐色	シルト質粘土	10YR8/2 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。
SK 7	1	10YR8/2	黒褐色	粘土質シルト	2.3VS/6 黑褐色柱状土質シルト少崩、黒褐色と灰褐色を含む。2.3VS/6 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。2.3VS/6 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。
	2	10YR8/2	灰黒褐色	粘土質シルト	10YR8/6 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。
	3	2.5Y5/4	黒褐色	シルト質粘土	10YR8/2 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。
SK 8	1	10YR8/2	灰黒褐色	粘土質シルト	2.3VS/6 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。2.3VS/6 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。
	2	10YR8/2	黒褐色	粘土質シルト	2.3VS/6 黑褐色柱状土質シルト少崩、黒褐色と灰褐色を含む。
	3	10YR8/4	黒褐色	粘土質シルト	10YR8/4 黑褐色柱状土質シルトアロワックを含む。

である。ほか北辺中央のSK21、南東隅のP618は平面形が不整円形で、他の柱穴と形状・規模とともにやや異なる。底面に柱痕跡の凹みがある。南辺中央のP725は柱を抜き取られており、底面から隅丸方形の柱痕跡が確認された。ほかP463・665・441・360で、柱穴底面に深さ5~10cm程の柱痕跡の凹みを確認した。東西約330cm、南北約390cmを測る。柱間は東西で150~168cm、南北は西辺で108~132cm、東辺で150~210cmである。主軸方位は南北軸でN=0~1°Wである。

SK 6・7・9 造構観察表

造構	グリッド	座標	主軸方位 (長軸基準)	幅員 (m)	平面形	断面形	底面	遺物・歴史	
								新しい道構	古い道構
SK 6	N162~163 W88~89	-	SK20・小方正 積石A3・C3	N=84°~E	180 75 30	隅丸方形	U字型	平面	遺物出土なし。
SK 7	W157~160 W85~86 665~2010	P433+477 SD10~11、小 溝(遮蔽)A1(2) 665~2010	N=2°~W	270 85 30	長軸円形	U字型	平面	床ロクロ土脚跡の破片少箇出。	
SK 9	N162~163 W88~91	-	小溝(遮蔽)C3+ A3	N=89°~E	160 80 40	隅丸方形	U字型	床ロクロ土脚跡の破片少箇出。	

SB 6 振立柱建物跡 柱穴土層注記表・計測表

造構	幅員 (cm)	層位	土色	土性	備考			
					SB 6 長軸	短軸		
P453	33	59	72	1	2.594/2	暗灰褐色	粘土質シルト	2.5V5/4 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
				2	2.594/2	暗灰褐色	粘土質シルト	2.5V5/4 黄褐色地土質シルトブロックをやや多く含む。
				3	2.593/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V5/2 黑褐色地土質シルト少箇出。
				4	2.593/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V5/4 黄褐色地土質シルトブロックを多量含む。
				5	2.593/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V5/2 黑褐色地土質シルトブロックを多量含む。
P458	34	33	15	1	2.594/2	暗灰褐色	粘土質シルト	2.5V4/2 黑褐色地土質シルトブロックを少箇出。
				2	2.594/2	暗灰褐色	粘土質シルト	2.5V4/4 黄褐色地土質シルトブロックを少箇出。
				3	2.594/2	暗灰褐色	粘土質シルト	2.5V4/4 黄褐色地土質シルトブロックを少箇出。
				4	2.593/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V5/2 黑褐色地土質シルトブロックを少箇出。
				5	2.593/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V5/2 黑褐色地土質シルトブロックを少箇出。
				6	2.592/1	黒色	粘土	粘板岩。
P739	32	(19)	52	1	10784/2	黒褐色	シート質粘土	10V5/4(+)に小(黄褐色シルトブロックやや多量、面化物・焼土和少箇出)。
P1000	47	41	52	1	574/2	灰オーライト	粘土質シルト	黒褐色地斑。
P454	38	34	40	1	573/1	オーリー頭部	シルト	3.5V4/3 黄オーリー頭部多量、面化物を微量含む。
P422	(36)	35	27	1	10784/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックをやや多箇出。
P440	45	34	38	1	2.574/3	オーリー頭部	粘土質シルト	2.5V3/4 黄オーリー頭部色シルトブロックを少箇出。
			2	2.574/2	暗灰褐色	粘土質シルト	2.5V3/4 黄褐色地土質シルトブロックを少箇出。	
			3	2.573/2	暗オーリー頭部	粘土質シルト	2.5V3/4 黄褐色地土質シルトブロックを少箇出。	

SB 7 振立柱建物跡 柱穴土層注記表・計測表

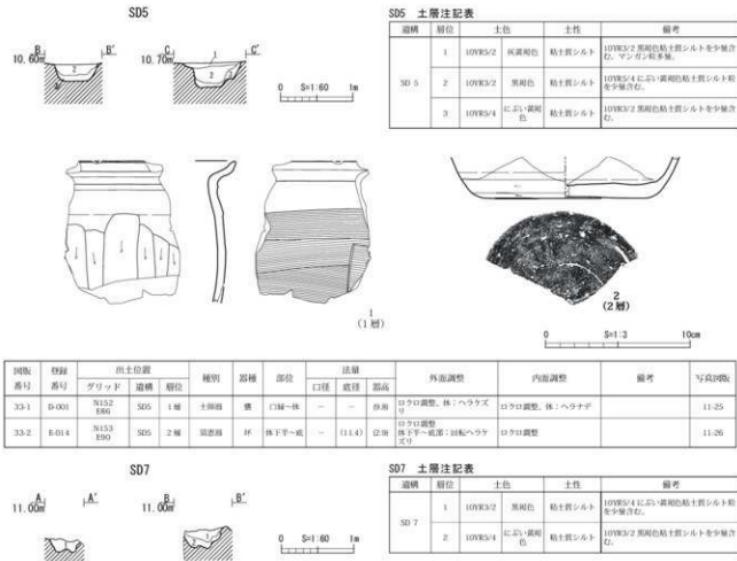
造構	幅員 (cm)	層位	土色	土性	備考			
					SB 7 長軸	短軸		
P441	41	32	32	1	10784/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) 黄褐色地土質シルト少箇出。
				2	10784/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) 黄褐色地土質シルトブロックを少箇出。
				3	10784/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックをやや多量含む。
P559	40	(27)	35	1	2.573/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V3/4 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
P560	42	(29)	69	1	10784/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックや多量含む。
SK21	660	50	20	1	2.573/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V3/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
				2	10785/4	灰褐色	シート質粘土	10V5/4(+) 黑褐色色を帯びる。
P665	45	44	33	1	10784/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) に小(灰褐色地)粘土質シルトロックを少箇出。表面剥り。
				2	10783/2	灰褐色	シート質粘土	10V5/4(+) に小(灰褐色地)粘土質シルトロックを少箇出。
P790	29	25	11	1	2.573/2	黒褐色	シート質粘土	2.5V3/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
P712	27	25	27	1	10783/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V3/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
P604	36	25	36	1	10783/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5V3/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
P618	53	50	31	1	2.573/2	黒褐色	シート質粘土	2.5V3/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
				2	2.574/3	オーリー頭部	粘土質シルト	2.5V3/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
				3	2.573/3	暗オーリー頭部	粘土質シルト	2.5V3/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックを少箇出。
P725	72	49	82	1	10783/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) に小(灰褐色地)粘土質シルトロックを少箇出。
				2	10783/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) に小(灰褐色地)粘土質シルトロックを少箇出。
P470	32	28	42	1	10782/1	黒色	粘土質シルト	10V5/4(+) に小(灰褐色地)粘土質シルトロックを少箇出。
P463	(26)	(33)	32	1	10784/2	灰褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) 黄褐色地土質シルト小ブロックや多量含む。
P694	(24)	22	55	1	10783/2	黒褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) に小(灰褐色地)粘土質シルトロックを少箇出。
P800	44	(19)	19	1	10783/2	黒褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) に小(灰褐色地)粘土質シルトロックを少箇出。
P444	39	26	42	1	2.574/2	暗灰褐色	粘土質シルト	2.5V3/2 黄褐色地土質シルトブロックを少箇出。
P1126	39	26	42	1	10783/2	黒褐色	粘土質シルト	10V5/4(+) に小(灰褐色地)粘土質シルトロックを少箇出。

第6表 SB 6 振立柱建物跡および周辺土坑・SB 7 振立柱建物跡計測表・土層注記表

3. 溝跡

(1) SD 5 溝跡（第 18・33 図） N151～155・E85～100 グリッドで検出した。SK 5、小溝状遺構 A10・11 群、B 5 群、C 3・16 群と重複関係にあり、SK 5 より古く、その他の遺構より新しい。主軸方向は N-78°-E で、検出した長さは 16.0m を測り、遺構の東端・西端は調査区外へ延びる。幅 50～70cm、深さ 18～37cm で、断面形は U 字型である。傾斜方向は判然としない。溝の底面には工具痕跡が明瞭に観察される。堆積土は 3 層で、1 層は主に溝跡西側で堆積が確認された。3 層は基本層 V 層のブロックを多く含む。遺物は土器器および須恵器の破片が出土しており、西側の 1 層中で出土した土師器壺 1 点と、2 層中から出土した須恵器環 1 点を図示した。第 33 図 1 はロクロ整形の壺である。口縁から胴部上半の破片のため、全体の器形は不明であるが、胴中央部付近に最大径を持ち、頸部にかけて緩やかにすぼまる。口縁はやや内湾しながら立ち上がる器形である。調整はロクロ整形後、外面胴部で縱方向へのヘラケズリ、内面胴部に横方向へのヘラナデの施された痕跡が観察された。2 は須恵器環の底部である。口縁から底部上半は欠損しており全体の形状は不明であるが、平底で外傾して直線的に立ち上がる器形を呈するものと思われる。体部下半から底部は回転ヘラケズリ調整が施される。

(2) SD 7 溝跡（第 18・33 図） N157～159・E85～100 グリッドで検出した。SK 7・15・22、小溝状遺構 A10・11 群、C 3 群と重複関係にあり、小溝状遺構 A10・11 群より新しく、その他の遺構より古い。主軸方向は N-82°-E で、検出した長さは 16.0m を測り、遺構の東端・西端は調査区外へ延びる。幅 40cm、深さ 14cm で、断面形は U 字型である。傾斜方向は判然としない。底面には工具痕が明瞭に観察される。堆積土は 2 層であり、2 層は基本層 V 層のブロックを多く含む。遺物は土器器細片が出土している。



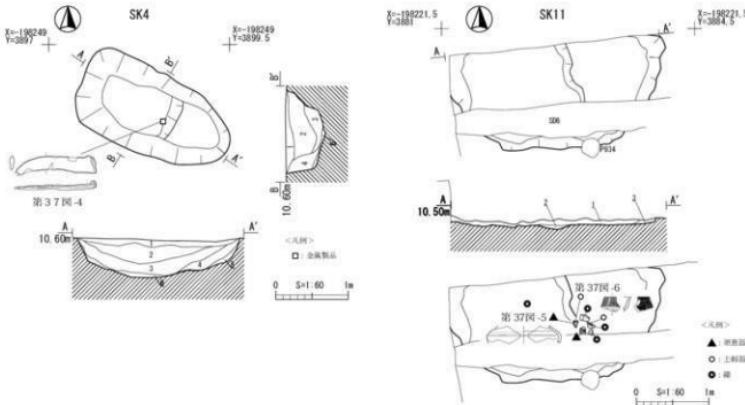
第 33 図 SD 5 溝跡断面図・出土遺物、SD 7 溝跡断面図

4. 土坑

V層上面で検出した土坑は19基を数える。このうちSB6、SB7掘立柱建物跡周辺の遺構として取り上げたSK6・7・9、掘立柱建物跡の柱穴としたSK21・23を除く14基のうち、SK4・11・13以外の土坑については観察表で報告する。なお、SK18は調査の結果、土坑とは認定されなかったため欠番とした。

(1) SK4土坑(第34・37図、図版7) N149～151・E97～100で検出した。小溝状遺構A12・14群、C13群、SK17と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は長楕円形で、主軸方位は長軸基準でN-64°-Wである。規模は長軸220cm、短軸120cm、深さ40cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は幅広のU字型で、底面はほぼ平坦である。堆積土は6層に分層される。遺物は主に3層中で出土したものが多いた。鉄製の鎌の刃のほか、土師器壺・甕破片および須恵器破片がやや多く出土している。また被熱した礫が出土している。土師器・須恵器はいずれも細片であったが、これらの中から須恵器壺1点、土師器壺2点、鉄製鎌を図示した(第37図)。土師器には、製作にロクロを使用した环破片が含まれている。

(2) SK11土坑(第34・37図、図版8) N177～179・E81～84で検出し、北側と西側は調査区外へ延びる。SD6、SK14と重複関係にあり、SD6より古くSK14より新しい。平面形は不整円形と思われ、規模は長軸300cm、短軸140cm、深さ3～10cmを測り、壁面はやや外傾し立ち上がるが、残存状況が悪く不明な箇所が多い。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層である。遺物は遺構底面でややまとまりが見られ、土師器壺の破片・須恵器甕の破片、被熱を受けた礫などが出土している。このうち土師器壺1点と須恵器長頸瓶1点を第37図に図示した。

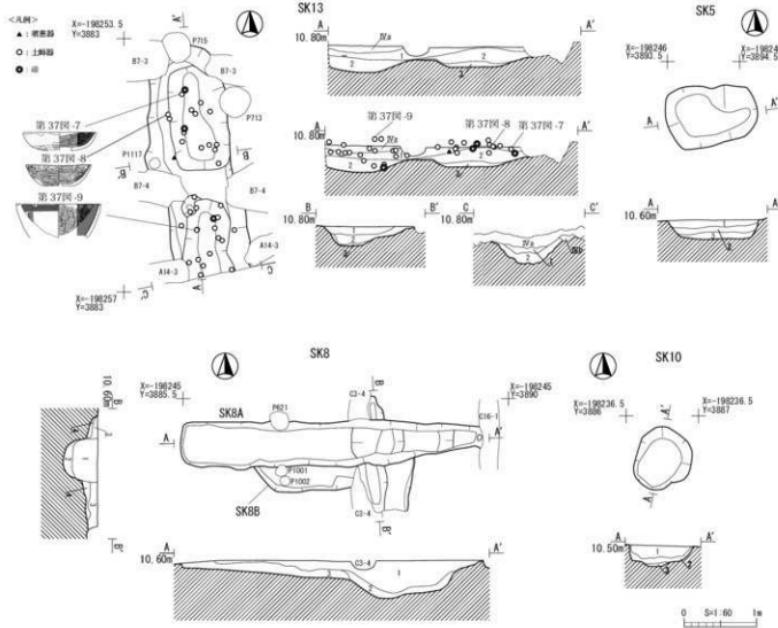


第34図 SK4・11土坑平面図・遺物出土分布図・断面図

(3) SK13土坑(第35・37図、図版9) N143～146・E83～85で検出し、南側は調査区外に延びる。小溝状遺構A12・14群、B7群と重複し、本遺構が古い。平面形は長楕円形で、主軸方位は長軸基準でN-9°-Wである。規模は長軸320cm、短軸100～110cm、深さ25～35cmで、壁面は急角度で立ち上がる。堆積土は3層で、1・2層には炭化物や焼土が多く混入する。また1層上面は小溝状遺構群を作ら耕作により削平されており、遺構周辺の小溝状遺構や基本層IV層中には炭化物・焼土が多く含まれている。遺物は1層中から出土し、土師器壺および甕の破片が多い。他、須恵器甕破片が少量、被熱した礫が多く出土しており、長さ20cm程度の大型の

第2節 V層上面検出遺構

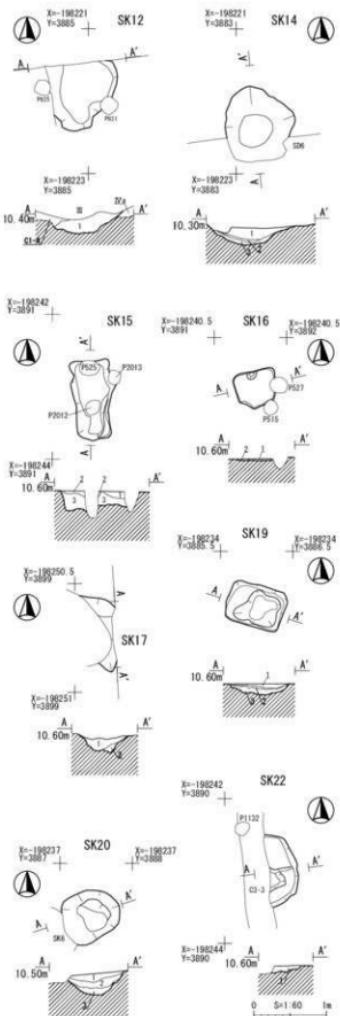
礫も2点程出土している。出土状況は遺構範囲の基本層IV層中で出土したものと含め第35図に図示した。またこれらの遺物から土器器坏2点、鉢1点を第37図に図示した。



土坑 計測および観察表

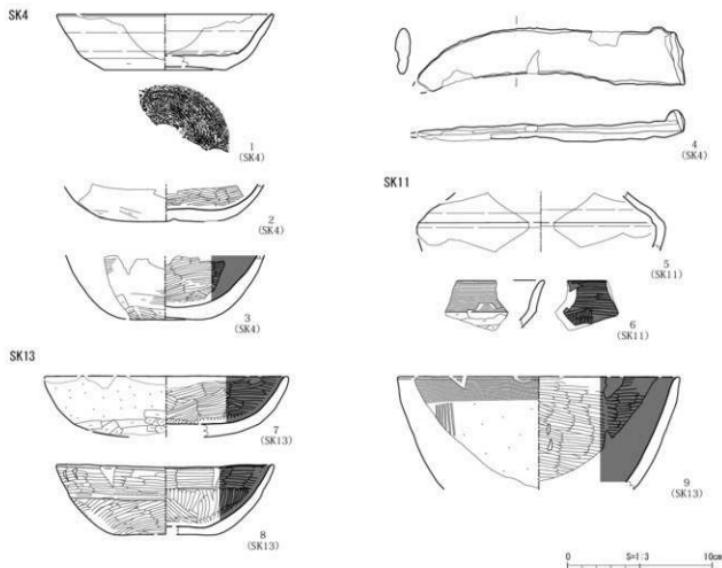
遺構	グリッド	底面		主軸方位 (長軸基準)	幅員 (m)	平面形	断面形	底面	遺物・層号
		新しい遺構	古い遺構						
SK 5	N132 - 134 E93 - 95	-	SD 5, 小遺構 器坏 C3 + A10	N - 29° - E	12.5	90	30	圓丸右角形	U字型 平面 土器器坏1点、鉢1点が出土。底面形状は SK17 出土の器 器坏形状と同様、側面のV字形。
SK 8A	N133 - 135 E93 - 90	小遺構遺構 C3 器坏 F101 + 11	P612	N - 89° - E	4.15	60	60	長楕円形	U字型 平面 新田の跡あり。土器器坏および器坏、漆器の漆片・瓦片が出土。
SK 8B	N133 - 135 E93 - 90	小遺構遺構 C3 器坏 F1001 + 11	P602	N - 89° - E	3.95	158	5~10	不整形	- -
SK10	N102 - 104 W86 - 87	小遺構遺構 A8 器坏	A8	N - 37° - E	85	75	35	短円形	U字型 平面
SK12	N117 - 179 E86 - 89	小遺構遺構 G1 器坏	G1	N - 2° - W	100	90	20~25	不整形	底面 平面 土器器坏6点が少額出土。
SK14	N178 - 179 E83 - 84	SD6, SK11	-	N - 7° - W	100	90	20~25	U字型 平面	遺物出土無し。
SK15	N144 - 147 E84 - 85	SD 7, 小遺構 器坏 A10 + 11	P529 + 2011 + E10	N - 8° - W	3.90	115	40	圓丸左角形	短円形 平面 土器器坏、漆の漆片が少額出土。
SK16	N159 - 160 E84 - 85	小遺構遺構 A10 + 11	P515 + 327	-	55	50	5	圓丸左角形	- 平面 土器器坏、漆の漆片が少額出土。
SK17	N150 - 151 E100	SK 4	-	N - 12° - W	90	50	35	不整形	U字型 平面 底面形状の細部が少額出土。
SK18	N166 + 86 - E89	-	小遺構遺構 A8	N - 72° - W	80	60	15	平面形	U字型 平面 壁面は全周剥離。
SK20	N165 - 162 E88	SK 6 + 10. 器坏	P625 + C3 + C8	N - 61° - E	90	60	40	不整形面	U字型 平面 2種の漆から漆文と扁平な漆、漆石用が中央まとめて出土 (縦文 上端に24.45mm×14.45mm)。
SK22	N157 - 158 E91	小遺構遺構 C3 器坏	C3	N - 12° - W	100	40	15	短円形	U字型 平面 土器器坏少額出土。

第35図 SK13土坑平面図・遺物出土分布図・断面図、SK 5・8・10 土坑平面図・断面図



第36図 SK12・14・15～17・19・20・22 土坑平面図・断面図

第2節 V層上面検出遺構



回復番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	法量(cm)			外側調整	内側調整	参考	写真回数
		グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高				
37-1	E-007	N176～183 E96～99	SK4	2層	土師壺	II	口縁～底	(35.0)	(8.3)	3.0	内側調整、底下平一底均 道：内側へラケズリ、底： 回転切削輪	ロクロ調整		12-1
37-2	C-003	N176～183 E96～99	SK4	2層	土師壺	II	体下平～底	—	9.1	(2.6)	ハラミズリ	ハラミガキ	底部に斜方×、側面	12-2
37-3	C-002	N176～183 E96～99	SK4	2層	土師壺	II	体～底	—	(3.0)	(4.4)	ハラミズリ～ハラミガキ	ハラミガキ	内面黒色修理	12-3
37-5	E-013	N178 E83	SK11	1層	土師壺	II	底大部	—	—	(4.0)	ロクロ調整	ロクロ調整		12-5
37-6	C-015	N178 E84	SK11	1層	土師壺	II	口縁～脚上	—	(3.4)	口縁：ヨコナギ 脚上：内側均	ハラミガキ	内面黒色修理		12-6
37-7	C-013	N146 E84	SK13	1層	土師壺	II	口縁～底	(36.0)	—	4.2	内側均	ハラミガキ	内面黒色修理、当面摩滅	12-7
37-8	C-012	N146 E84	SK13	1層	土師壺	II	口縁～底	15.5	7.0	4.8	口縁～底：ヨコナギ 内側均	ハラミガキ	内面黒色修理	12-8
37-9	C-014	N144 E83	SK13	N.s.層	土師壺	II	口縁～体	(38.5)	—	(7.8)	口縁：ヨコナギ、体～ハラ 内面均	ハラミガキ	内面黒色修理、外面摩滅	12-9
回復番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	法量(cm)			重量(g)	参考	写真回数	
		グリッド	遺構	層位				長径	幅	厚さ				
37-4	N-002	N150 E99	SK4	3層	金銀製品	III	—	(18.5)	4.0	(1.2)	91.6			12-4

第37図 SK 4・11・13土坑出土遺物

第37図1～4はSK 4で出土した遺物である。1は須恵器窓である。器形は、平底で厚い底部から直線的に立ち上がり、わずかに外反する。切り離し後、体部下端から底部外周に、回転ヘラケズリ調整が施される。2・3は土師器の窓である。いずれも口縁が欠損しており全体の形状は不明である。2は平底、3はやや丸底気味で緩やかに内湾しながら立ち上がるものと推測される。調整は、2は外側底部にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施され、外側底部に「×」の刻書が見られる。3は外面上部はミガキ、底部付近でヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は全面にヘラミガキが施されたち黒色処理される。4は鉄製の鎌と思われる。鎌びのため全体の形状は判然としない。

5・6はSK11で出土した遺物である。5は須恵器長頸瓶の肩部の破片である。全体の形状は判然としないが、肩が張り明確な稜を有する器形を呈するものと推測される。6は土師器環の破片である。全体の器形は判然としないが、外面の口縁と体部との境に稜を持ち、口縁は短く外反して立ち上がる器形である。調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリで、内面は口縁部に横方向、体部に縱方向のヘラミガキが施された後、黒色処理が施される。

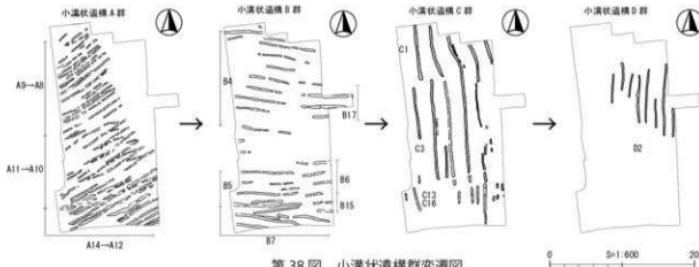
7～9はSK13で出土した遺物である。7・8は土師器の环である。いずれも堆積土中より出土した。7は8に比して口径が大きく、平底気味の底部から内湾して立ち上がり、外面に稜や段を持たない。調整は、外面体部上半は摩耗しており判然としないが、体部下半から底部にかけてヘラケズリが施され、内面は全面にヘラミガキ調整後黒色処理が施される。8は平底で緩やかに内湾しながら立ち上がり、外面の口縁部と体部との境にわずかに段を有する器形である。調整は内外面ともヘラミガキが施され、内面は黒色処理が施される。

9は土師器の鉢である。底部を欠損している。緩やかに内湾しながら立ち上がり、口唇部に向かってやや内傾する器形である。調整は外面口縁部ヨコナデ、体部は摩耗しているが一部にハケメ調整が残る。内面は全面にヘラミガキ調整後、黒色処理が施される。

5. 小溝状遺構群

基本層IV層は、調査区内が生産域であった際に畑の耕作に伴って形成された耕作土である。このため、下面是当時の耕作の深さの下限により形成されたものとして、上面は後続する耕作の影響によって削平されたものとして、それぞれ認識することができる。IV層の細分層であるIV a層とIV b層についても、これと同様の形成過程が存在していたものと考えられ、その結果、両層の土質には若干の違いが生じたと考えられる。調査の結果、V層上面で検出した小溝状遺構群は、その耕作の方向性と重複関係、土質の違いなどから、大別して4群(A～D群)に区分されることが明らかとなった。これらの小溝状遺構群は基本層IV層からIII b層にかけて、ある程度の時間差をもって存在していた遺構であると考えられることから、今回の調査における遺構変遷を辿るうえで一つの基準軸としている。

大別した小溝状遺構群は後続する小溝状遺構群と直接の重複関係を持つことにより新旧を確認している。また並行する溝間の間隔やその分布域の違いなどから細分することが出来るが、これが同一時期での耕作単位の違いを示すものであるのか、耕作単位の時間差を示すものであるのかについては、出土遺物が少ないため判断することが出来なかった。以下では、確認した小溝状遺構群について時期の古いものから順に記載する。各時期の小溝状遺構群内で細分された群における重複関係は第38図に示し、文章中においては新旧を→、重複がない場合は・で示した。



第38図 小溝状遺構群変遷図

第2節 V層上面検出遺構

(1) 小溝状遺構 A群 (第 18・38・40 図) 北東から南西に斜行する小溝状遺構群である。分布域の違いから、北側の 2 群 (A 8 → A 9) と南側の 4 群 (A10 → A11・A12 → A14) の 6 群に細分することができる。いずれも IV 層を母材とし、IV b 層を形成した耕作に伴う遺構である。SI 2・SK13 と重複し、これらより新しい。また、SI 1 との重複関係は持たないが、その周辺で消失するように耕作深度が浅くなる状況が確認された。

(2) 小溝状遺構 B群 (第 18・38・40 図) 東西方向に展開する小溝状遺構群である。調査区中央では分布が少なく北側の 2 群 (B 4・B17) と南側の 3 群 (B 5 → B 6・7) の 5 群に細分することができるが、南北間の重複関係は無いため、南北に展開する小溝状遺構群の耕作が平行して行われていたかは不明である。B 7 群は調査区南端付近で確認したが、傾斜方向が若干異なる。ほか調査区中央で検出した SD10・11、調査区北側で検出した SD 6 は遺構の規模、堆積状況からこの時期の小溝状遺構とした。いずれの小溝状遺構も IV b 層を母材とし、IV a 層を形成した耕作に伴う遺構である。小溝状遺構以外の遺構との重複関係において、B 4 群は SB 2・SB 3 と重複関係あり、これより新しい。また B17 群は埋没過程にあった SI 1 を耕作域に含む。B 6 群は SB 1 と重複関係あり、これより新しい (第 4 章第 2 節参照)。

(3) 小溝状遺構 C群 (第 18・38・39・41 図、図版 12) 南北方向に展開する小溝状遺構である。C 1・3・13・16 の 4 群に細分することができる。いずれも先行する小溝状遺構 B 群とはその耕作の方向性が大きく異なり、遺構の重複関係も比較的明瞭に観察されることから、ある程度の時間差をもって成立していたものと考えられる。IV a 層の耕作に伴う遺構だが、先行する小溝状遺構 B 群の耕作範囲との境を基本層内で明確に区分できるものではない。この小溝状遺構群と直接重複関係を有する遺構のうち、新しい遺構は SB 6・7・SK 4・5・7・9・17、SD 5 であり、古い遺構は、SB 1・2・4・5・SK8・12・22、SD7 等がある (第 4 章第 2 節参照)。

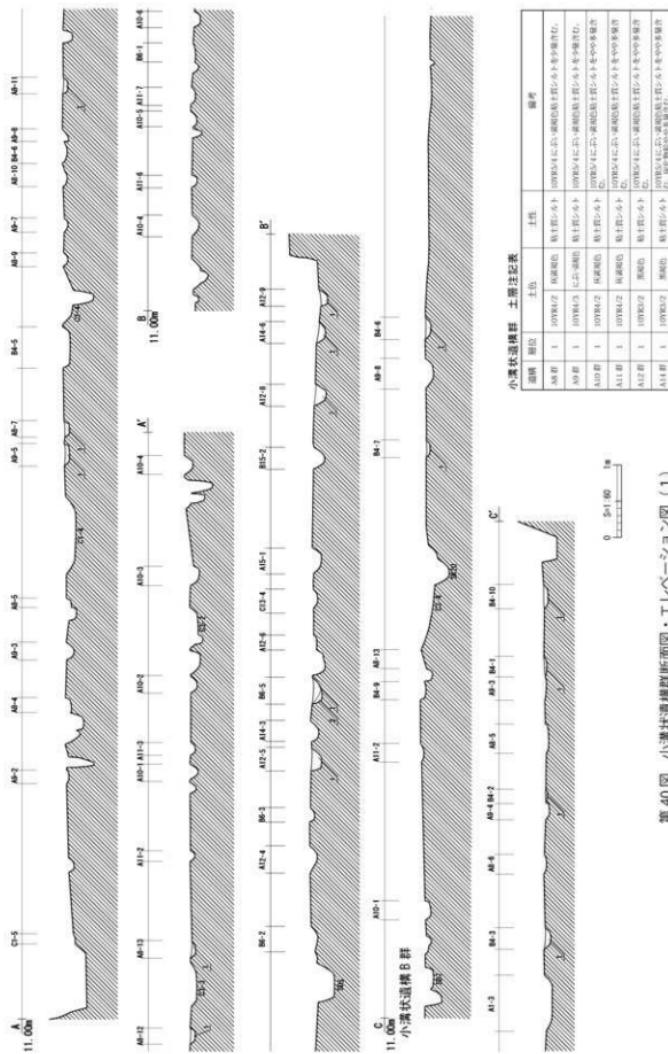
(4) 小溝状遺構 D群 (第 18・38・41 図) 調査区東側において検出した SI 1 の堆積土上層では、南北方向の小溝を数条検出した。これらの小溝状遺構群の分布は SI 1 周辺に限られており、断面観察において SI 1 周辺に限つて確認された III b-1 層に連なる小溝状遺構群の可能性がある。小溝状遺構 C 群以降に堆積した自然堆積層と IV 層を母材としていたと考えられるが、検出が部分的であったため詳細は不明である。V 層上面で検出した遺構の中では、ピット・小柱穴の一部を除き、最も新しい遺構である (第 4 章第 2 節参照)。

回版 番号	發見 番号	出土位置 基部	縦別	沿緯	部位	法量 (cm) 口径 底径 高さ	外側調整	内側調整	備考	写真回版
39-1	C-O16	N300-163 E38-91	C3-3	1 基	土器底	底 底 — (8.0) (2.7) 穴開		ヘラナデ 側面江船→下端 ラケツ	構成凹丸、外側摩滅	12-10

第 39 図 小溝状遺構群出土遺物

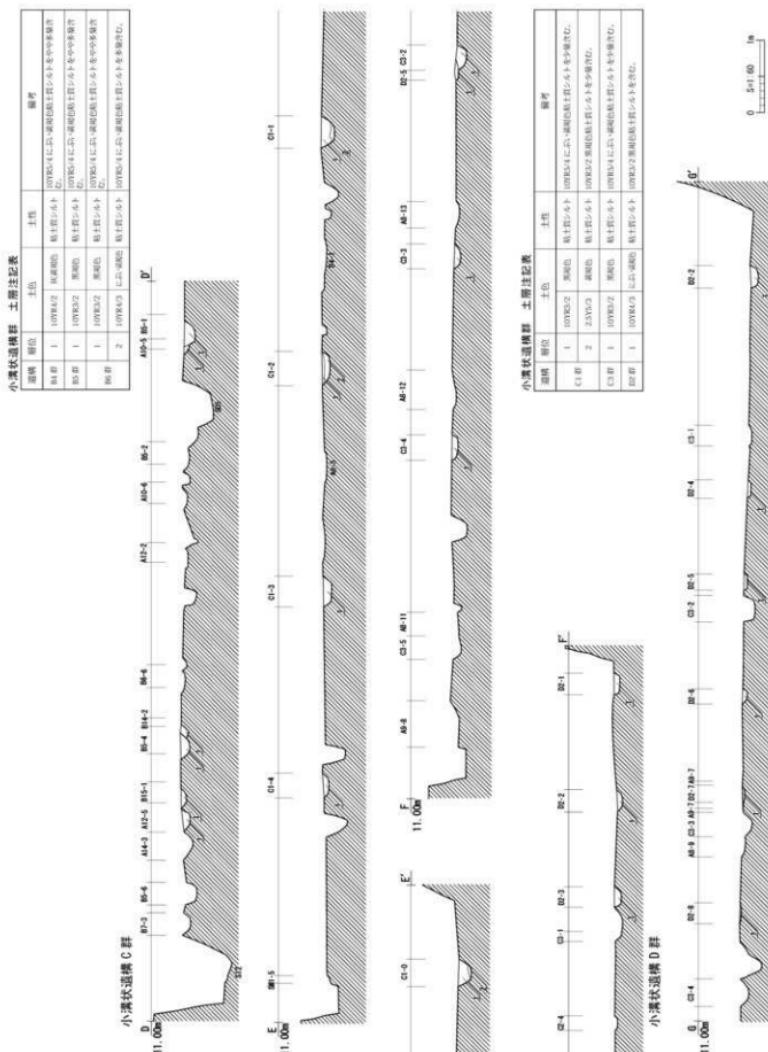
第 39 図 1 は土師器底の破片と推測される。全体の形態は不明である。底部から胴部下半にかけて外反する器形を呈する。III 層遺物集中範囲で出土した第 16 図 2 と同様に胴部下端付近に焼成前に施された穿孔を四方に有するものと推測される。底部下端は内外面ともわずかにまみ出され面を有する。調整は、外面は磨滅して判然としないが、内面はヘラナデ、ユビオサエの痕が確認される。

小溝状遺構A群



第40図 小溝状遺構断面図・エレベーション図(1)

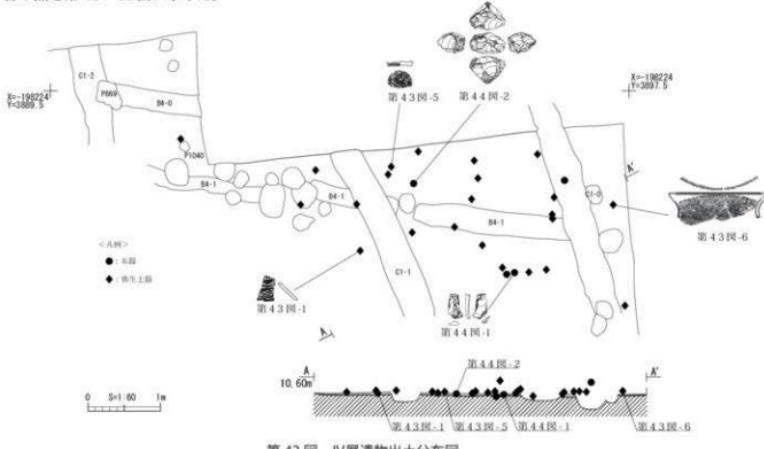
第2節 V層上面検出遺構



第41図 小溝状遺構断面図・ワレーベーション図 (2)

6. 遺構外出土遺物

(1) IV層出土遺物範囲 (第42～44図、図版12) 調査区北東側では、IV層中から弥生時代の土器片が比較的多く出土している。第42図は調査区北東隅の出土状況を分布図として示した。この範囲における出土遺物は、弥生土器が23点、石器4点が確認された。これらの遺物のうち器形が判別できた弥生土器8点と石器・石核各1点を第43・44図に示した。



第42図 IV層遺物出土分布図



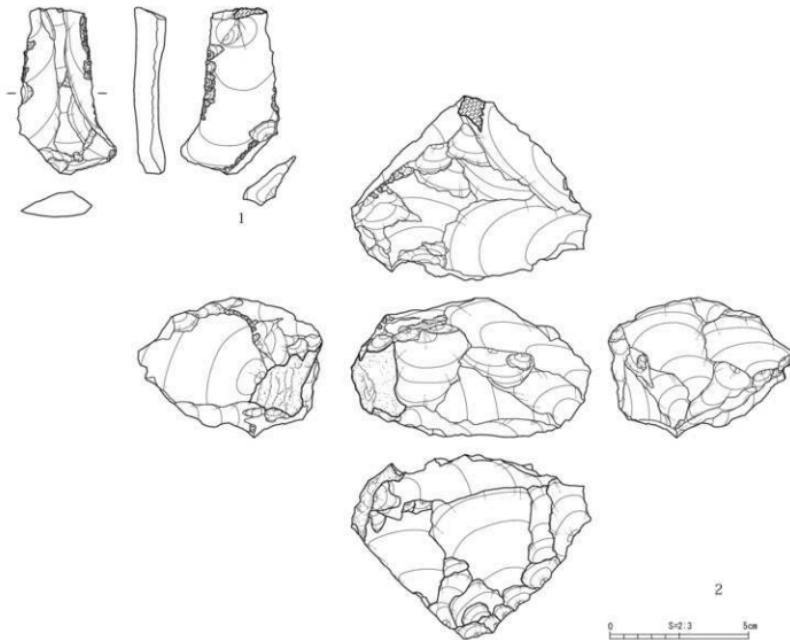
図版番号	器種	出土位置			種別	器種	部位	表面	外側調整	内面調整	備考	写真回数
		番号	グリッド	遺構								
43-1	B-001	N174 E94	-	矢塙	弥生土器	蓋	外底下平～斜傾	焼附文・波綱文・滑附文・滑附直線文	U打字			12-11
43-2	B-005	N164～167 E92～93	-	矢塙	弥生土器	縫	口縫～外縫	LR綱文・平行直線文	U打字			12-12
43-3	B-002	N172～175 E92～95	-	矢塙	弥生土器	縫跡	外縫	LR綱文・平行直線文	U打字			12-13
43-4	B-012	N164～167 E92～93	-	矢塙	弥生土器	縫跡	外縫	LR綱文・波綱文	U打字			12-14
43-5	B-003	N175 E90	-	矢塙	弥生土器	縫 or 深鉢	外底下平～波綱	植物茎葉直線文・波綱文	手打		瓦器木箱組	12-15
43-6	B-006	N175 E90	-	矢塙	弥生土器	底	口縫～外縫	口縫部・口縫部・口縫部・口縫部・U打字	U打字			12-16
43-7	B-004	N172～175 E92～95	-	矢塙	弥生土器	縫	外縫	円点刻文	U打字			12-17
43-8	B-020	N172～175 E92～95	-	矢塙	弥生土器	縫	口縫～外底下平	口縫部：LR綱文・外縫：U打字	U打字			12-18

第43図 IV層出土遺物 (1)

第2節 V層上面検出遺構

第43図1は蓋の体部下半～口縁部である。LR繩文を横位に半単位ずらして層状に回転施文した後、幅2～2.5mmの沈線で連続山形と横位直線文が施文され、沈線間はミガキ調整により地文が磨消される。2は鉢の口縁部～体部上半である。外面はLR繩文を回転施文の後、口縁部に2条の平行沈線、内面には1条の沈線文が施文される。3・4は深鉢の体部である。ともにLR繩文の回転施文の後、3は2条の平行沈線が、4は沈線が1条施文される。5は鉢もしくは深鉢の底部である。外面には植物茎回転文が施された後、沈線文が施文される。底面には木葉痕がある。6は蓋の口縁～頸部で、口唇部にLR繩文が回転施文される。7・8は蓋である。ともに、体部に列点刺突文が施され、8は口唇部にLR繩文が回転施文される。1～8のいずれも内面はミガキ調整が施される。

第44図1は、不定形石器である。流紋岩の巻長の剥片を素材とし、主に右側縁部に部分的に二次加工が施され、刃部が形成されている。2は流紋岩の石核である。



第44図 IV層出土遺物（2）

図版 番号	登録 番号	出土位置			種別	器種	法量(cm)			測定角 (度)	重量 g	石材	肩型	自然面	備考	写真 番号	
		グリッド	遺構	層位			全長	幅	厚さ								
44-1	Ka-e6-001	N174	—	V層	打削石器	不定形石器	3.8	3.4	1.1	—	174.15	流紋岩	—	—	RF	12-19	
44-2	Ka-m0-001	N175	E95	—	V層	打削石器	石核	4.8	0.3	0.4	—	197.98	流紋岩	—	—	自然面有	12-20

(2) 縄文土器・弥生土器(第45・46図、図版13) 今回の調査では縄文土器・弥生土器の破片が約260点程出土している。縄文土器は調査区全体にわたり出土しており、基本層Ⅲ～Ⅳ層および検出遺構堆積土中から約80点が出土しているが、遺構に伴うものでは無く、混入したものである。

弥生土器は破片約180点を数え、前述したⅣ層遺物集中範囲付近ないしは調査区北側での出土が125点と多い。他、ピット、小溝状遺構群等から出土しているが、これらは混入したものである。

以下、縄文土器と弥生土器に分けてその概要を報告する。

縄文土器は壺1点、鉢2点、深鉢6点を第45図に示した。すべて破片資料であり全体の形は判然としないが、その様文等から縄文時代後期から晩期初頭にかけてのものと考えられる。

第45図1は壺の体部上半と考えられる。無文の表面上に瘤状の突起が貼り付けられる。後期後葉の金剛寺式に位置づけられる。2は鉢の口縁へ体部である。LR縄文が施された後、口縁部に3条の平行沈線文が施文され、ヘラ状工具により刺突される。3・4は深鉢の体部と考えられる。3はLR縄文の地文に沈線文を施文し、ミガキ調整で縄文が磨消される。4は表面が摩滅しており判然としないが、ミガキ調整後に平行沈線文が2条施文される。5・6は深鉢の体部上半である。いずれもRL縄文の地文に刺突文が施文される。6は粘土を貼り付けた突起の下に横位の沈線文が施文される。7はRL縄文の地文に、口縁端部に刻みが施され、横位の沈線文が施文される。8は深鉢の体部で4条1單位の沈線文が縦方向に施文される。9は鉢の体部で、4条の平行沈線文が施文される。

弥生土器は、壺2点、高环1点、鉢及び深鉢9点、甕4点の計16点を第46図に示した。弥生時代中期前葉～後期の遺物が出土している。第45図-17は、種別不明である。

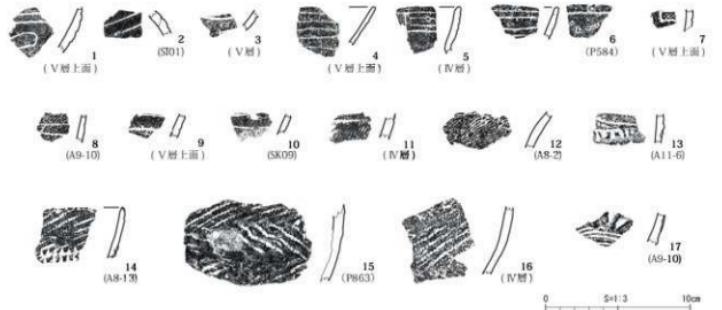
第46図1は鉢の体部である。LR縄文を横位に回転施文された後、沈線文が施文される。2は壺の体部である。2条の平行沈線文が斜行する。3は高环と思われる。無節1縄文の地文に幾何学文が施文される。4は鉢の口縁部で、5条以上の沈線文が横位に施文される。5・6は深鉢の口縁部で、5は四角文が、6は外面に複線変形工字

図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考	写真図版
		グリフ	遺構	層位							
45-1 A-004	-	C16-1	1層	縄文土器	壺	内部	瘤状突起	ナゲ			13-1
45-2 A-005	N158～175 E80～99	-	N1層	縄文土器	鉢	口縁	口縁部：平行沈線文 刺突文 体部：LR縄文	ナガ4			13-2
45-3 A-006	E92～103 E92～95	P160	1層	縄文土器	深鉢	体部上半	刺突文 (LR) 沈線文	ナゲ			13-3
45-4 A-007	-	P930	-	縄文土器	深鉢	体部上半	平行沈線文 三才斗	ナゲ			13-4
45-5 A-008	N144～147 E80～91	-	V層上面	縄文土器	深鉢	体部上半	RL縄文 刺突文	ナガ6			13-5
45-6 A-009	-	E5-4	1層	縄文土器	深鉢	体部上半	RL縄文 刺突文 突起	ナゲ			13-6
45-7 A-010	-	P770	1層	縄文土器	深鉢	口縁部	口縁部：セザン ボル：RL縄文 刺突文	ナゲ			13-7
45-8 A-011	-	S820	2層	縄文土器	深鉢	内部	平行沈線文	ナゲ			13-8
45-9 A-012	-	C16-1	1層	縄文土器	鉢	内部	平行沈線文	ナゲ			13-9

第45図 遺構外出土遺物(縄文土器)

第2節 V層上面検出遺構

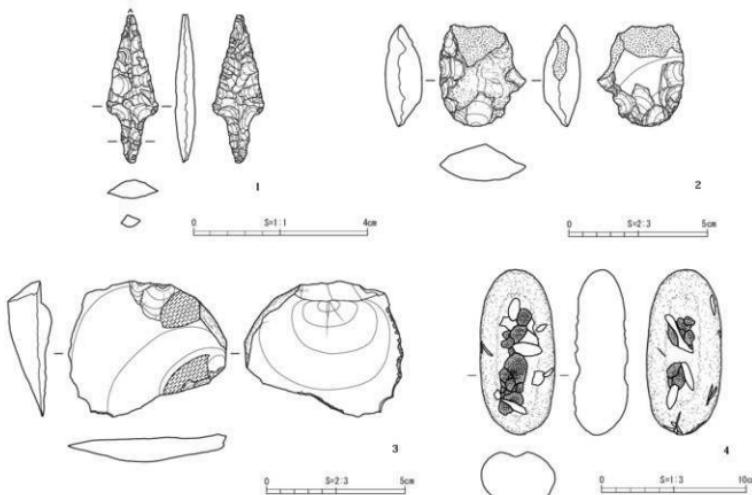
文が、内面には沈線文が横位に施文される。7～11は鉢または深鉢の体部である。7はLR繩文に四角文が施文され、ミガキ調整により消滅される。8はLR繩文の地文に平行沈線文が、9は撚糸文の地文に平行沈線文が弧状に施文される。10は無文の表面に、11は無縫I繩文の地文に横位の沈線文が施文される。12は壺の頸部で、R撚糸文の地文に、2本1組の波状の平行沈線文が施文される。13～16は弥生後期に属するものと考えられる。13は沈線文と横位の交互刺突文が施文され、14は口縁端部に刻みが、頸部に複数の横位の沈線文に交互刺突文が施文される。15は外面にLR繩文とRL繩文が羽状に施文される。胎土中に粗粒が混入した痕跡がある。16は外面にLR繩文が施文され、胎土中に粗粒が混入した痕跡が見られる。17は深鉢の体部である。RLの帯繩文と微隆起線文、三角形の刺突文が施文されている。



番号	登録番号	出土位置			梗部	部補	部位	外彌調整	内面調整	備考	写真図版
		番号	グリッド	通路							
4-1	B-009	—	NS02	—	V層	土壠	鉢	体部	LR繩文 横線文	摩滅	13-10
4-2	B-013	30H1	東側土壠	新生土壠	直	外縁	斜行する平行横線文	摩滅	13-11		
4-3	B-008	NS03	NS02	—	V層	土壠	高H	外縁	横消褪文(?) 楕円学文	ミガキ	13-12
4-4	B-014	NS17	NS02	—	V層	新生土壠	H	口縁	平行横線文	ミガキ	13-13
4-5	B-010	NS16	NS02	—	V層	新生土壠	深鉢	口縁・側面	LR繩文(内側文)	ミガキ	13-14
4-6	B-011	—	P584	東側土壠	新生土壠	深鉢	口縁裏	横消褪文上文字	横消褪	摩滅	13-15
4-7	B-013	NS18	NS02	—	V層	土壠	深鉢	外縁	横消褪文(LR繩文)	ミガキ	13-16
4-8	B-016	—	AD-10	東側土壠	新生土壠	深鉢	外縁	LR繩文 平行横線文	ミガキ	13-17	
4-9	B-017	NS19	NS02	—	V層	土壠	新H 深鉢	外縁	横消褪文 低Hの平行横線文	ミガキ	13-18
4-10	B-018	—	SK9	東側土壠	新生土壠	深鉢	外縁	LR繩文	ミガキ	13-19	
4-11	B-021	—	NS16	新生土壠	新H 深鉢	外縁上半	口縁文	横線文	ミガキ	13-20	
4-12	B-007	NS15	NS02	AB-2	V層	新生土壠	直	側面	横消褪文 波状の平行横線文(2本一致)	ナデ	13-21
4-13	B-022	NS2	NS02	A11-6	東側土壠	新生土壠	直	体部上半	横線文 交互刺突文	摩滅	13-22
4-14	B-023	—	AB-13	東側土壠	新生土壠	直	口縁・側面	横消褪文(?) 二段階(?) 横消褪文 交互刺突文(?)	ナデ	13-23	
4-15	B-024	NS13	NS02	P583	V層	新生土壠	直	外縁	LR繩文 RL繩文(?)	摩滅	13-24
4-16	B-025	NS10	NS02	—	V層	新生土壠	直	体部	LR繩文	ナデ	胎土に粗粒混入
4-17	B-019	—	AD-10	東側土壠	平H	深鉢	外縁	RL帶繩文 橫消褪文 二重形の刺突文	ナデ	13-25	

第46図 遺構外出土遺物(弥生土器他)

石器は、石鏃 1 点、不定形石器 1 点、微細剥離痕のある石器 1 点、敲石 1 点を第 47 図に示した。1 は有茎石鏃である。先端部をわずかに欠損している。細かな二次加工が施されており、最後に基部を成形している。断面形状は、身部がレンズ状、莖部は菱形を呈する。石材は珪質頁岩である。2 は不定形石器である。表面に自然面がある。全体的に被熱しており、上半部は剥落している。側縁部から基部に二次加工が残されている。石材は鉄石英である。3 は微細剥離痕のある剥片である。横長の剥片を素材とし、腹面の右側縁には、使用に伴うものと考えられる微細剥離痕がある。石材は流紋岩である。4 は敲石である。表裏面の中央に複数の敲打痕があり、表面の中央よりやや下側の敲打痕は敲打の累積により凹んでいる。石材は石英安山岩である。

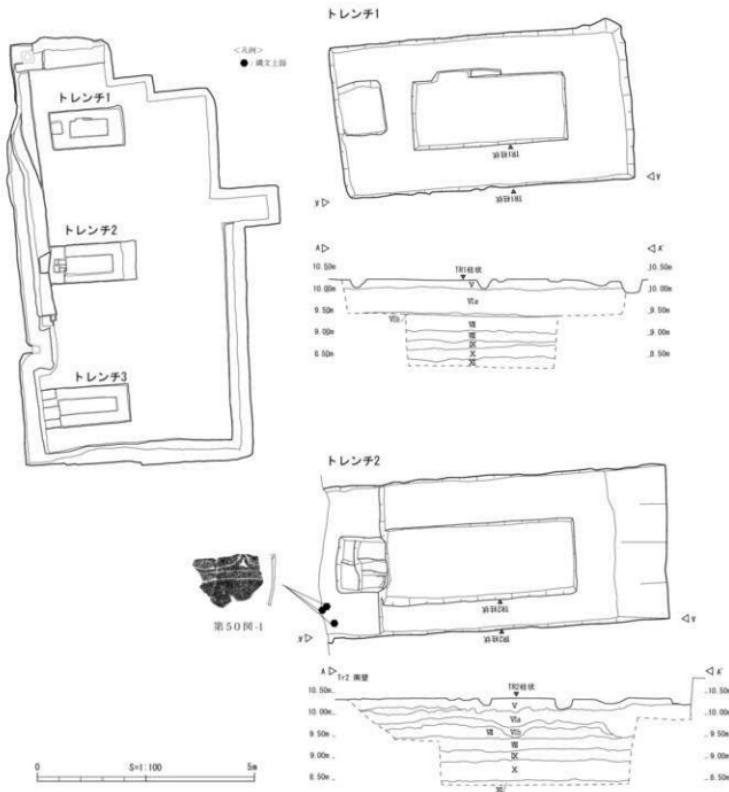


回復番号	骨種番号	出土位置		種別	基準	法量 (cm)			調査内度	重量 (g)	石材	縫合	自然面	備考	写真回数
		グリッド	遺構			全長	幅	厚さ							
47-1	Ka-e001	N180+083 E52+039	SH1	—	打製石器 石鏃	33.4	1.2	0.5	—	101	珪質頁岩	—	無	有茎、先端薄欠損	13-27
47-2	Ka-e002	N184+087 E52+035	SH1	—	打製石器 不定形石器	2.6	3.0	1.4	—	11.93	鉄石英	—	有	RF	13-28
47-3	Ka-k001	N172+175 E58+091	SH2	—	打製石器 微細剥離痕 のある剥片	4.7	5.5	1.5	—	25.69	流紋岩	—	有		13-29
47-4	Kce-001	N105 E102	SH1	—	磨石	11.4	5.2	3.8	—	260.73	石英安山岩	—	有		13-30

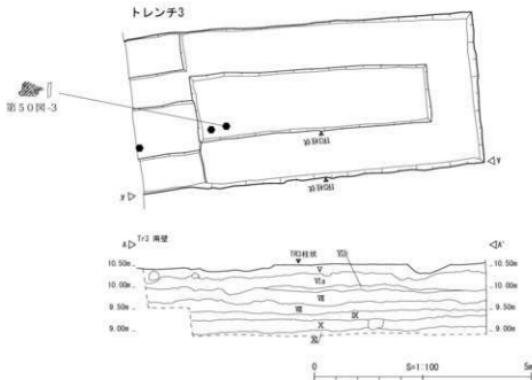
第 47 図 遺構外出土遺物（石器）

第3節 下層部の調査

基本層V層上面での調査終了後、調査区内に3箇所下層調査トレンチを設定し、弥生時代以前の遺構・遺物の確認・記録を目的とした調査（下層トレンチ調査）を実施した（第48・49図）。調査は、基本層V層上面からXI層まで層位的に掘り下げ、各層離面で遺構や遺物の残存状況を確認した。その結果、いずれのトレンチからも遺構は検出されず、トレンチ2のVIa層上面及びトレンチ3のVII層とX層で縄文時代後期から晩期の土器が3点出土した。各トレンチの基本層は大きな差はないが、基本層VI層は北に向かい層厚を増し、VI層以下は北側に下り傾斜する傾向がある。VII層以下では層厚に大きな変化は無い。

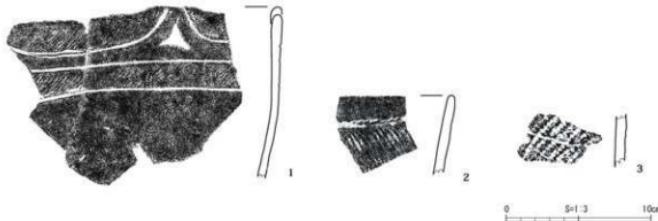


第48図 トレンチ1・2平面図・断面図・遺物出土分布図



第49図 トレンチ3平面図・断面図・遺物出土分布図

下層トレンチからは3点の縄文土器が出土した。第50図1は2トレンチVIa層より出土した深鉢の口縁から体部上半の破片である。口縁は波状を呈し、頂点の下方に、LR縄文の地文に沈線文及び三叉文が施される。沈線文で区画された内部は、磨き調整が施される。縄文時代後期末葉から晩期初頭に位置づけられる。2は3トレンチVII層より出土した深鉢の口縁から体部上半の破片である。RL縄文を施した後口縁部を磨消し、境界部分に無節Rの原体で横位に側面押圧を施している。3は深鉢体部の破片である。LR縄文の地文のみ観察される。



回収番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	外面調整	内部調整	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位							
SO-1	A-001	N150 E84	T12	VIa層	縄文土器	深鉢	口縁-側面	波状口縁 沈線文(左)・三叉文	丸形容		13-31
SO-2	A-002	N144～147 E85	T13	縄文	縄文土器	深鉢	口縁-側面	RL縄文 縫合押付	丸形容		13-32
SO-3	A-003	N147 E85	T13	X86	縄文土器	深鉢	側面	LR縄文	ナ子		13-33

第50図 下層トレンチ出土遺物

第4章 まとめ

第1節 出土遺物について

六反田遺跡では、総数 1873 点の遺物が出土した。その内訳は、土器 1808 点、金属製品 14 点、石器 51 点である。また、土器の内訳は、縄文土器 82 点、弥生土器 180 点、古代の須恵器 189 点・土師器 1357 点である。ここでは土器を中心とした遺跡の時期ごとの様相を概観していきたい。

(1) 縄文土器

縄文土器は遺構堆積土、並びにⅢ・Ⅳ層から 79 点が出土した。出土位置は調査区全域に跨る見られ、特別のまとまりは見られない。また下層トレンチ調査において 3 点が出土した。土器片は瘤状突起を有する第 45 図 1 や、三叉文が施される第 50 図 1 等、頗る縄文時代後期から晩期初頭にかけてのものと考えられる。

(2) 弥生土器

破片数約 180 点の出土が見られ、このうち約 7 割が調査区東部のⅣ層から出土している。それらの時期は、弥生時代中期前葉から中葉を主体とし、そのほか、中期後葉と後期の遺物が少量出土している。特筆されるものに、破片資料であるが、胎土に糊殻を混入した破片第 46 図 15・16 が上げられる。類例は仙台市内では、沼向遺跡（仙台市教育委員会 2010b）や富沢遺跡（仙台市教育委員会 1999a）等で出土している。これらの資料は弥生時代後期後に限定されており、何らかの特別な場合のみ糊殻を混入して土器を製作した可能性を示唆するものと考えられている（仙台市教育委員会 1999a）。今後の出土事例の蓄積が望まれる。

(3) 須恵器・土師器

今回の調査で出土した須恵器・土師器は基本層Ⅲ～Ⅳ層中および各遺構堆積土から出土している（註 2）。これらの遺物の中で、遺構に共存する遺物は限られており、SI 1・2 穫穴住居跡床面および施設で出土した遺物、SK11 土坑底面直上での出土遺物が相当する。また SK13 土坑堆積土において一括廃棄と思われる 1 層出土遺物がある。これらの出土遺物の中、土師器は国分寺下層式（氏家 1967）に相当するもの、古墳時代終末期の末葉（7 世紀末葉～8 世紀初頭）の特徴を有するものに分けられるが、それらの国分寺下層式を前後する範囲の検討については、「沼向遺跡第 4 次～34 次調査」（仙台市教育委員会 2010b）に詳述されている。国分寺下層式の時期は奈良時代の 8 世紀前葉から後葉と推定されており、以下、出土遺物を遺構ごとに報告する。

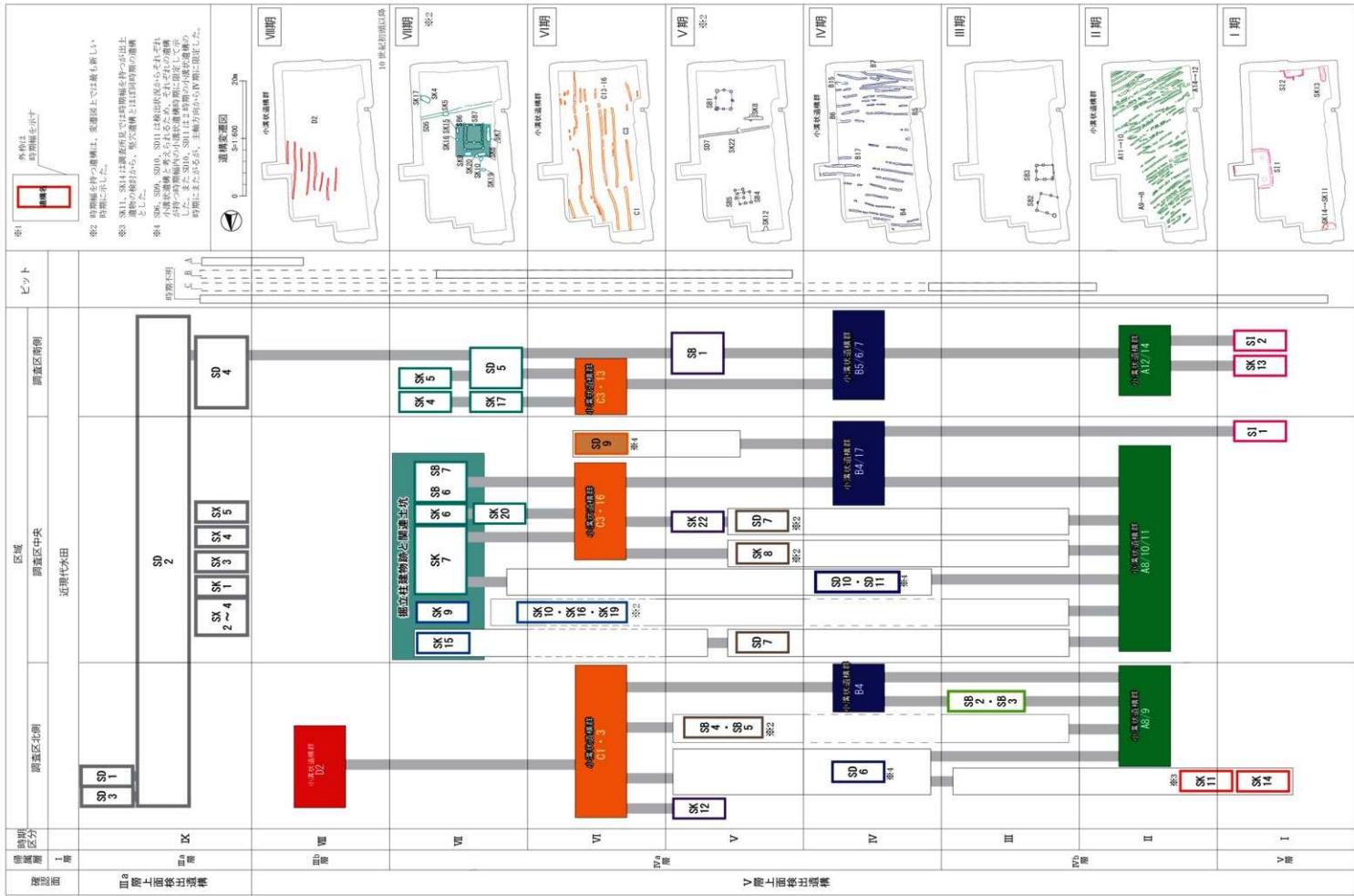
SK11 土坑：底面直上で出土した土師器環第 37 図 6 は、口縁部と体部の境に稜を持ち、口縁部は外反し、外面はヨコナデ調整されており、国分寺下層式に先行し、古墳時代後終末期の末葉の特徴を有する。

SK13 土坑：土師器環 2 点と鉢 1 点が出土している。第 37 図 8 は、内外面ともに口縁部と体部の境に段があり、内外面をミガキ調整する平底の环である。第 37 図 7 は器高に比して口径・底径が大きく、丸底の环であるが、底部と体部の境に不明瞭な棱を持つ。第 37 図 9 の鉢は口縁部と体部の境となる稜がほとんど消失した形であるが、口縁部はやや外反し、国分寺下層式に先行する形態の特徴がある。これらは国分寺下層式の中でも古い様相を示していると考えられる。

SI1 穫穴住居跡：主な遺物は、床面施設から出土した土師器環 2 点、土師器甕 2 点、須恵器環 1 点である。第 22 図 6 と第 22 図 7 は、カマド推定位置の西側に位置する SK2 土坑状遺構から出土した土師器環である。いずれも内外面とともに丁寧にミガキが施されている。第 22 図 6 はほとんど底部が残存しないが、平底と推定される。第 22 図 7 は丸底の环で底部までミガキが施される。ともに国分寺下層式に相当する。第 22 図 8・9 は同じ土坑で出土した土師器甕である。第 22 図 3 は SK3 土坑状遺構から出土した須恵器環であり、器形・調整から 8 世紀前葉～中葉と考えられる。

SI2 穫穴住居跡：新段階の床面出土遺物として、第 25 図 1 と第 25 図 2、古段階の床面出土遺物として第 25 図 3 がある。第 25 図 1 は外面のミガキは部分的で段には有さず、底部から体部にかけてヘラケズリの残る平底の环である。また内

第51図 遺構姿遷図



面の黒色処理は完全ではない。第25図2は器高がやや高い丸底の壺であるが、体部下半から底部はヘラケズリ調整が施されている。第25図3は最大径を体部上位に持ち口縁部はやや内傾して立ち上がる。いずれも国分寺下層式に相当するが、底部は平底あるいはそれに近い形態であり、新しい様相を示していると考えられる。

このように、これらの遺構の時期は、国分寺下層式期に先行するSK11、国分寺下層式期でも前半の8世紀前葉～中葉のSK13、SI1、後半の8世紀中葉～後葉のSI2の2時期に大きく分けられる。

また、六反田遺跡のこれまでの調査成果をみると、国分寺下層式期の遺構は第2次調査第1号住居跡、第3次調査7号住居跡、第5次調査SI111住居跡などがあり、これらを含めて、この時期の居住域と生産域の展開を考えいく必要がある。

第2節 遺構の変遷について

V層上面で検出した遺構については、4群に区分される小溝状遺構群との重複関係を軸とし、それぞれの遺構の帰属時期を整理した（第3章参照）。4群の小溝状遺構群は、A群がIVb層、B群およびC群がIVa層、D群がIIIb-1層を耕作土としており、これらとの重複関係や調査区壁土層断面における確認状況、出土遺物の検討などから、今回の調査で確認した遺構をⅥ期に区分し、その前後関係を示したもののが第51図である。本図中では個々の遺構の帰属時期において、その上限あるいは下限のみが判別し得たもの、あるいは他の遺構との重複関係が確認されず時期幅があるものについては、最も新しい時期とした。また、出土遺物からⅠ期は古墳時代終末期の末葉から奈良時代にかけての遺構群であり、8世紀末葉以降は、居住域と生産域としての土地利用を繰り返していたことが知られる。そのうち灰白色火山灰堆積以降のⅦ～IX期は10世紀初頭以降の平安時代と考えられる。以下、各時期に該当する遺構の変遷である。

Ⅰ期

今回の調査において確認された最も古い遺構の時期である。主に居住域として使用されていた時期で、調査区東側でSI1竪穴住居跡、南側でSI2竪穴住居跡およびSK13土坑、調査区北側でSK11土坑が検出された。

Ⅱ期

小溝状遺構A群の時期であり、居住域から生産域へと土地利用が変化した。なお、小溝状遺構A群は先行するSI1竪穴住居跡と直接的な重複関係を持たない。

Ⅲ期

調査区北側でSB2・SB3掘立柱建物跡が建てられた時期で、生産域から居住域へ再び土地利用が変化した時期である。Ⅲ期の遺構は、平面的な遺構の重複関係に加え、西壁断面の観察において、IVb層に伴う小溝状遺構A群とIV期以降の小溝状遺構（B群）を伴うIVa層との層間に、これらの柱穴断面が確認されたことにより分離したものである。

Ⅳ期

小溝状遺構B群の時期である。本期の小溝状遺構群はⅡ期のそれに比してその検出密度がやや低く、特に調査区中央付近ではほとんど確認できなかった。なおSI1竪穴住居跡はその埋没過程で、小溝状遺構B17群の耕作によって削平されていることが判明している。

Ⅴ期

調査区南側でSB1掘立柱建物跡が建てられた時期である。北側ではSK12土坑がある。SB1掘立柱建物跡はⅣ期・Ⅴ期の小溝状遺構群との重複関係が確認されている。SK12土坑はⅥ期の小溝状遺構（C群）より古いことが北壁断面で確認されており、当期に帰属すると判断した。このほか当期にその上限を持つ遺構には、調査区中央で確認されたSD7、SK8、北側のSB4、SB5がある。いずれもⅤ期の小溝状遺構群（C群）より古い、

第2節 遺構の変遷について

IV期の小溝状遺構群（B群）との重複関係が不明な遺構である。このためⅢ期もしくはV期に帰属する遺構として時間幅をもって示した。

VI期

小溝状遺構C群が相当し、小溝の方向性が南北方向へ大きく変化した時期である。

VII期

調査区中央で確認したSB 6・7 据立柱建物跡と SK 6・7・9 土坑、SD 5 溝跡、調査区南東で確認したSK 4・5・17 土坑がそれぞれ帰属する。また SK10・16・19 土坑は小溝状遺構A群に先行することが重複関係から明らかであるが、それ以外の遺構との重複関係が確認できなかった。このためVII期以前の遺構として表現している。なお、この時期には SB 6・7 据立柱建物跡の外側に SK 6・7・9 土坑が検出されている。これと類似する遺構が大野田遺跡第2次調査（仙台市教育委員会2001）で SB 1 据立柱建物跡として報告されている。SB 6 据立柱建物跡および周辺土坑の帰属する時期や施設の性格などについては、今後の検討課題である。

VIII期

小溝状遺構D群が展開する時期であり、小溝の方向性は先行する小溝状遺構C群に類似した南北方向に認められる。SI 1 穫穴住居跡において灰白色火山灰を含むⅢb-2層があることから、10世紀初頭以降の遺構群であるが、先行するVII期の遺構群の中で出土遺物から明確に時期を推定し得るものは限られており、VII期とVIII期との間にどれだけの時期幅があったかは明確ではない。

IX期

Ⅲ層上面において検出した SD 2～SD 4 溝跡、SK 1 土坑、SX 2・3・5・7 性格不明遺構が相当する。

第3節まとめ

1. 六反田遺跡は、仙台市太白区大野田に所在する。学校校舎増築計画に伴い、第9次調査を行った。
2. 今回の調査では古墳時代終末期の末葉から平安時代にかけての遺構が検出され、I～IX期の9時期にわたる遺構の変遷が明らかにされ、大きな成果となった。I期は古墳時代終末期の末葉の土坑と奈良時代の竪穴住居跡・土坑、II期は烟跡、III期は据立柱建物跡、IV期は烟跡、V期は据立柱建物跡・土坑・溝跡、VI期は烟跡、VII期は据立柱建物跡・溝跡・土坑、VIII期は平安時代の烟跡、IX期は平安時代の溝跡・性格不明遺構等が検出された。
3. 遺物は、縄文時代後期から近世にかけて出土している。近世の遺物は極めて少なく、古代の遺物は8世紀前葉から8世紀後葉を中心とする。弥生時代の遺物は中期前葉から中葉を主体とし、中期後葉と後期の遺物も少量出土している。縄文時代の遺物は後期から晩期初頭にかけて少量出土している。
4. 今回の調査区は大野田官衙遺跡の西辺区画溝から約35mほど西側に位置している。大野田官衙遺跡（仙台市教育委員会2011b）では官衙を構成する建物跡は8世紀第Ⅱ四半期には廃絶していたと考えられている。今回の調査では、直接官衙に隣接すると推測される遺構は検出されていないが、遺構変遷I期の古い時期は官衙の時期と平行している。また、大野田官衙遺跡では官衙に後続する時期には鐵滓や驪の羽口片が出土しており、大野田古墳群9A区でも広範囲で鐵滓や驪の羽口の破片が出土している。鐵治関連遺構は下ノ内遺跡においては、8世紀後半から9世紀とされる竪穴住居が鐵治関連遺構として報告されているが、今回の調査においては驪の羽口の破片の出土はあるが、鐵滓等の出土は無く、調査範囲における鐵治関連遺構の展開に関しては不明である。

註

- 1: 松本秀明 1994 「仙台平野の成立」『仙台市史・自然編』仙台市史編さん委員会
- 2: 遺構の時期は異なるが、SK 4 土坑からは、国分寺下層式期の土器が多く出土しており、第37図に3点を図示した。第37図2は平底の壺である。残存する外体部にはミガキの痕跡はない。また内面は黒色処理されておらず、外面が一部炭化している。第37図3は内外面が底部までミガキが施される平底の壺である。これらの土器と同一層から出土した須恵器壺第37図1は器高がやや高く、体部から口縁部は直線的に外傾する傾向を示す。底部は回転式切り後、底部外周から下端に回転ヘラケズリが施されており、8世紀中葉から後葉のものと考えられる。

引用・参考文献

- 石川日出志 2005 「関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年」『科研報告書
- 氏家和典 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底壺をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
- 小林達雄他 2008 「縄文・繩文土器」『縄文土器刊行会』
- 酒野裕彦 2011 「東北地域」『講座日本の考古学5 弥生時代（上）』青木書店
- 須藤 隆 1998 「東日本先史時代文化変化・社会変動の研究－縄文から弥生へ－」墓修堂
- 仙台市教育委員会 1984a 「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集
- 仙台市教育委員会 1984b 「六反田遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第72集
- 仙台市教育委員会・日本電信電話株式会社東北支社 1987 「六反田遺跡Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第102集
- 仙台市教育委員会 1990 「下ノ内道路・仙台市高速道路開通跡調査報告書Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第136集
- 仙台市教育委員会 1996 「中在家南遺跡」仙台市文化財調査報告書第213集
- 仙台市教育委員会 1999 「富沢遺跡第104次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第235集
- 仙台市教育委員会 2000a 「高田B遺跡」仙台市文化財調査報告書第242集
- 仙台市教育委員会 2000b 「大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第243集
- 仙台市教育委員会 2001 「大野田遺跡第2次調査」仙台市文化財調査報告書第252集
- 仙台市教育委員会 2004a 「元袋道跡－都市計画道路「内・柳生線」開通遺跡－他発掘調査報告書Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第272集
- 仙台市教育委員会 2009 「養利園遺跡第2次 保院前道跡 発掘調査報告書－都市計画道路「南小泉茂庭線」開通遺跡調査報告書Ⅱ
- 仙台市教育委員会 2010a 「西台烟道跡第1・2次調査－仙台市あすと長町土地区調整事業関係道路発掘調査報告書V－」仙台市文化財調査報告書第359集
- 仙台市教育委員会 2010b 「南向道路第4～34次調査－宮城県仙台港背後地上地区調整事業関係道路発掘調査報告書Ⅲ－」仙台市文化財調査報告書第360集
- 仙台市教育委員会 2011a 「西台烟道跡第3次調査－仙台市あすと長町土地区調整事業関係道路発掘調査報告書IV－」仙台市文化財調査報告書第388集
- 仙台市教育委員会 2011b 「下ノ内道路・春日古墳・大野田古道跡ほか－仙台市富沢駅周辺土地区調整事業関係道路発掘調査報告書Ⅱ－」

写 真 図 版

写真図版



1. 調査区周辺



2. III層上面造構完掘全景（東から）



3. V層上面造構検出全景（南から）



4. V層小溝状造構完掘全景（南から）

写真図版 1 調査区周辺・調査区全景



1. 調査区北壁断面（南から）



2. 調査区西壁断面（北から）



3. 調査区東壁断面（西から）



4. 調査区西壁断面（東から）

写真図版2 基本層序

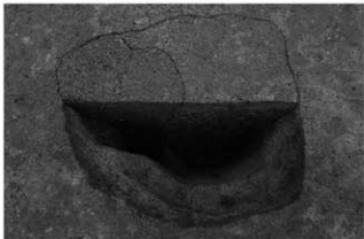
写真図版



1. SI 1床面遺構完掘（西から）



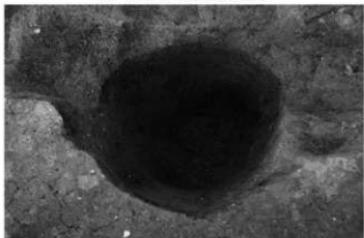
2. SI 1掘り方完掘（西から）



3. SI 1-P 1断面（西から）



4. SI 1-P 1完掘（西から）



5. SI 1-P 5完掘（西から）



6. SI 1円面甕出土（北から）

写真図版3 SI 1竪穴住居跡（1）



1. SI 1-SK 1遺物出土（北西から）



2. SI 1-SK 1遺物出土（西から）



3. SI 1遺物出土（北から）



4. SI 1-SK 3遺物出土（東から）



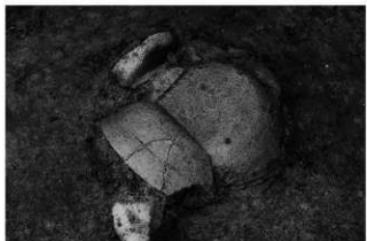
5. SI 2床面遺物出土（北から）



6. SI 2掘り方断ち割り断面（北から）

写真図版4 SI 1竪穴住居跡（2）・SI 2竪穴住居跡（1）

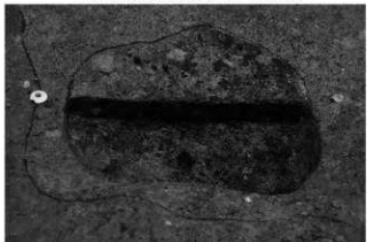
写真図版



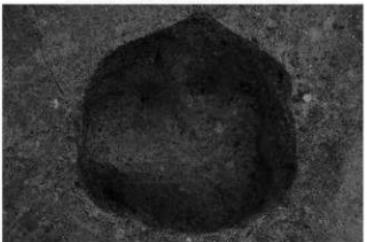
1. SI 2 新段階床面遺物出土（北から）



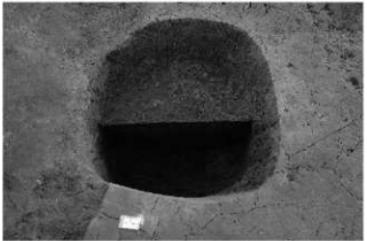
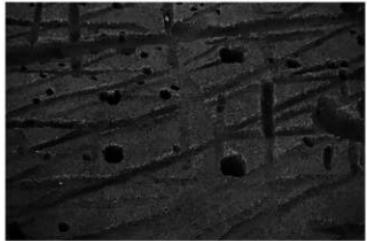
2. SI 2 古段階床面遺物出土（北から）



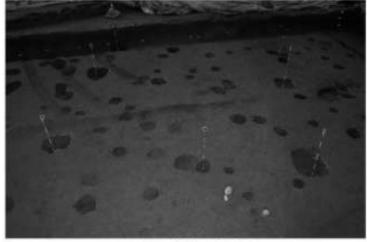
3. SI 2-P 1 断面（北から）



4. SI 2-P 1 完掘（北から）



6. SB 1-P343（南から）

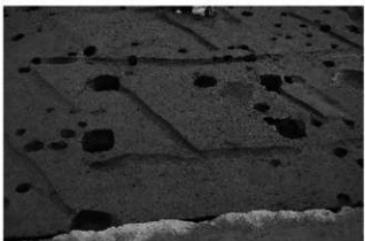


7. SB 2 全景（東から）



8. SB 2-P356 断面（北から）

写真図版5 SI 2 壁穴住居跡（2）・掘立柱建物跡（1）



1. SB 3 全景（西から）



2. SB 3-P388 断面（南から）



3. SB 3-P388 完掘（南から）



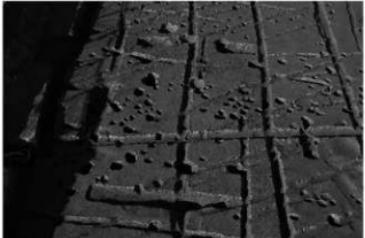
4. SB 3-P2017 断面（東から）



5. SB 4・SB 5 全景（南から）



6. SB 4-P400 断面（南から）



7. SB 6・SB 7・周辺土坑（南から）



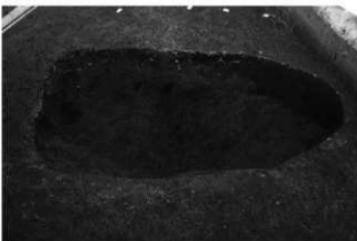
8. SB 6-P452 断面（南から）

写真図版 6 掘立柱建物跡（2）

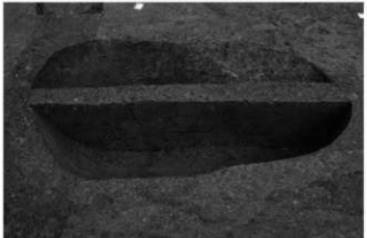
写真図版



1. SK 4 断面（南から）



2. SK 4 完掘（南から）



3. SK 5 断面（南から）



4. SK 5 完掘（南から）



5. SK 6 断面（南から）



6. SK 6 完掘（南から）



7. SK 7 断面（北から）



8. SK 7 完掘（東から）

写真図版 7 土坑（1）



1. SK 8 棟出（南から）



2. SK 8 断面（南から）



3. SK 9 断面（南から）



4. SK10 断面（南から）



5. SK11 遺物出土（南から）



6. SK11 完掘（西から）



7. 調査区北端検出（東から）



8. 調査区北壁 SK12 断面_ 南

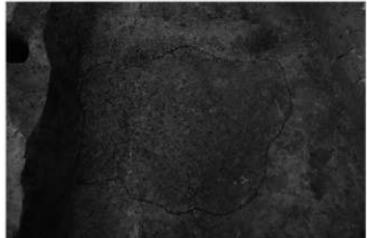
写真図版



1. SK13 遺物出土（東から）



2. SK13 完掘（東から）



3. SK14 梱出（東から）



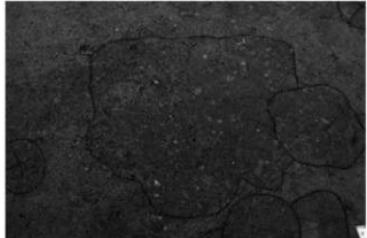
4. SK14 断面（東から）



5. SK15 梱出（南から）



6. SK15 完掘（南から）

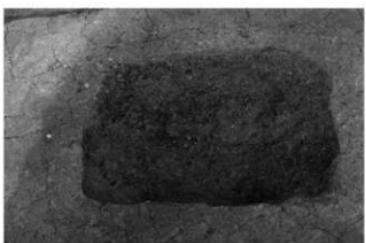


7. SK16 梱出（南から）



8. SK16 断面（南から）

写真図版 9 土坑（3）



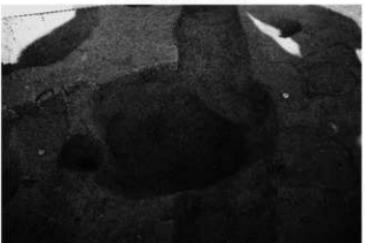
1. SK19 焼土・炭化物層検出（南から）



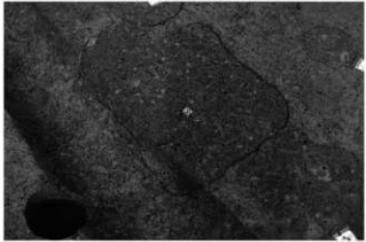
2. SK19 断面（南から）



3. SK20 断面（南から）



4. SK20 完掘（南から）



5. SK21 検出（南西から）



6. SK21 断面（南から）



7. SK22 検出（南西から）



8. SK22 断面（南から）

写真図版 10 土坑（4）

写真図版



写真図版 11 出土遺物 (1)



写真図版 12 出土遺物（2）

写真図版



写真図版 13 出土遺物 (3)

仙台市文化財調査報告書 第398集

六反田遺跡第9次調査発掘調査報告書

2012年3月

発行 仙台市教育委員会
宮城県仙台市青葉区二日町1番1号
文化財課022（214）8839

印刷 今野印刷株式会社
宮城県仙台市若林区六丁の目西町2-10
022（288）6123